

ついてゆくやうに決心したのですもの。それでお困りなら、そりや、あなたのせもよ。あなたが私を愛して下さつて、何故私の心をお盗みになつたんですの。私にもうあなたを離れてはゐられないのですもの。私はあなたを愛してゐるんですもの。

シアベエル。——我々はこゝに逃げて来て、悪いことをしましたね。……哀れな小さいな此部屋に不吉なことが我々と共に這入つて來はしないかと私は恐れてゐます。

フオセツト。(喜ばしげに。——私は馬車屋にさう言ひますわ。馬車は、曉方になる一時間前に立ちますわ。本當に私達はさうしてなくてはなりませんわ……。(リュツクス側の部屋で嘆息をつく。))

ユウゴオ。——彼はまだ嘆息してゐる。

フオセツト。(壁に唇をつけて。——お隣りの方、どうなさいましたの。いらつしやいませよ。慰めて上げますわ。(リュツクス戸を叩く。))

リュツクス。(外で。——開けて下さい、開けて下さい、私です。)

## 第二場

同じ人々。アダム・リュツクス。

(フオセツト戸を開く。リュツクス、帽子も冠らず、着物を亂して、疲れた興奮した様子で這入つてくる。彼らは彼に同情をもつて挨拶する。)

フアベエル。——今晚は、リュツクス君。

リュツクス。——おゝ、我が友達！(彼は泣く。)

フオセツト。——まあ、リュツクスさん。どう遊ばしたの。

リュツクス。——おゝ、最も大きな喜びと、最も残酷な悲み。僕の心は、苦痛と幸福とでいつばいです。

ユウゴオ。——悲しきは、我々誰しも持つてゐます。だが、リュツクス君、喜びだつて。

さうして君は喜ばしいことに會つたのです。

リュックス。——僕は、彼女にあの天使に、あの天國の魂に會つたのです。……  
フォセツト。——あなた、どなたのことを言つてゐらつしやるの。

リュックス。——怪物を殺した婦人です。我々の爲めに、自分の生命を抛つた人です。

ユウゴオ。——神聖なコルデイのことか。

リュックス。——シャルロットです、私の崇拜するシャルロットです。私は彼女を見ま  
したが、眼の光は消えうせ、身體は血まみれになつてゐました。

ファベエル。——不幸な人だ。まあ、君は恐ろしい勇氣をもつてゐたものだね……

リュックス。——お終ひまで、僕は彼女の後にくつゝいて行つたのです。僕は彼の方かたを探  
してゐたのではなかつたのです。僕は何にも考へずに、パリイを歩いてゐました。

三ヶ月前にあれ程こゝに来て愉快だと思つたが、今は此パリイは、僕の魂が恐怖し  
てもがいてゐる納骨所のやうに僕には思はれたのです。ある力が僕を引きずつて行  
きました。さうです、私は行くとも思つてゐなかつたのでした。屹度、それは、天

國でさう定められてあつたのでせう。おゝ、僕が疑つてゐた神秘的驚くべき存在よ。

あなたに恵みあれ。あなたが僕の魂を焼き勵ます爲めに、火のやうな斯う言ふ試煉  
をあなたはこさへておかれたのです……僕はサン、トノレ街につきました。叫んで  
ゐる群衆が、僕の通る邪魔をしました。街を廻つてゆくと、僕は一つの車に出會ひ  
ました。一人の婦人が、赤いシャツをつけ、白い帽子を冠つて立つて居りました。  
僕は恐怖に襲はれました。逃げ出さうとしましたが出来ませんでした。そして、僕の  
膝が身體を殆ど支へ切れない位でしたが、僕は立つてゐなければなりませんでした。  
僕の眼は見まいとしても開いてゐました。僕は、此勇敢な少女を見ました。僕の信  
じたやうに女の顔に超人的の力が彩られてはゐないで、野蠻的な叫喚の中にあつて  
見透すやうな純潔な眼付をして、不變の悲みを堪へてゐるのを見た時の僕は、どん  
なにぞつとしたこととせう。青い透明な光明、其が僕の上に身をよせかけました。

其光明が群衆の中にある僕の眼を見貫きました。其が僕の心を深い悲みで貫きまし  
た。僕の身體の血は凍り、苦しくて氣絶しさうでした。僕は、彼女の魂が僕の上に

下り、僕を選び、彼女の使命が僕に托されたと感じました。凡ての考へはなくなりました。僕は、僕を指命した此天使に眼を離さずに、きしめく車にくつついて行きました。彼女はもう僕を見てゐませんでした。彼女をとりまいてゐるものは何にも彼女の爲めにはもう生きてはゐなかつたのです。彼女は夢想してゐました。落ち着いてゐました。疲れた様子で笑みを含んでゐました。廣場で、彼女は下りました。私には彼女の姿が見えなくなりました。彼女は、氣味の悪い壇の上に姿を表はしました。彼女は、罵りわめく民衆を、何と言ふ眼付でも見廻はしたせう『哀れな人々よ、あなた達は知らない！……』と、如何にも言ふやうに思はれました。僕は、尙、彼女の青白い顔、悲しい嘆きで半ば開いてゐるその唇を再び見ました。赤い血が、彼女の切られた頸から流れました。汚らしい手が、彼女の灰がよつたブロードの髪をゆすぶつてゐました。……僕はその後を言ふことは出来ません。僕は叫びました、僕は通らうとしました、段を上らうとしました、此祭壇の上に、その血、崇拜する彼女の血の中にひたつて横はらうと思ひました。人々は僕を拂ひのけました、

僕は争ひました、心臓がはり裂けさうになつて、氣絶しました。民衆の一人の男が氣の毒に思つてくれて、僕を此恐ろしい光景から遠ざけて連れて行つてくれました。……僕は此家の戸の所に居りました、夜になつてゐました、雷鳴がしてゐました。そして、大砲が、マラーの光榮を祝して居たのです。

フオセツト。——まあ、リュッククスさん、あなたの着物は、破けて、雨にぐつしより濡れてゐるわ。

リュッククス。——彼女は何處に居るのですか。石灰土が彼女の殘酷らしい死體を貪り食つてゐるのです。

ユウゴオ。——彼女の復讐をしに行かう。

リュッククス。——彼女の復讐？ おゝ、彼女はそんなことを欲してゐなかつた。彼女の眼は斯う言つてゐました。『靜かに、靜かに、お互に愛し合なさい、赦し合ひなさい。』

私はあなた達を赦します、そして、私はあなた達を愛します。』と。

フアベエル。——けれども、彼女は人殺しをしたのだ。

リュックス。——彼女は憎悪を殺したのです。彼女は緊急な義侠的な仕事の爲めに、犠牲となつて、身を投げ出したのです。彼女は、自分の白い肩の上に、此世の罪をとりに来たのです。彼女は、我々の罪をあがなつてくれたのです。彼女の希望、彼女の青春、彼女の美しい生命、それら凡てを、喜こんで犠牲にして、人間の間をさくものを亡ほし、世界に平和を與へやうとしたのです。

ユウゴオ。——仕事は少しも完成しては居らないのだ。それを完成しやうぢやないか。

リュックス。——さうだ、彼女のやうにしなければならぬ、戦はなければならぬ。あゝ、如何にそれは苦しいこととせう。他人をうつ、苦しめる。……自分一人で苦しみ、自分の生命を捧げる丈でいゝのなら！ 死ぬんだがなあ！ そして、人間が、有徳で、幸福であればなあ！

フアベエル。——まあ、リュックス君、そんなことは、坊さんの夢だよ。君は奇蹟を信ずるのかね。

リュックス。——あらゆるものは、奇蹟ですよ。(騒ぎが外で増してくる。)

ユウゴオ。——あゝ、斯う言ふ叫び。氣狂ひになりさうだ。

フアベエル。——騒ぎが近くなつてくるよ。

ユウゴオ。——彼らの侮辱的な熱中は僕に戦を挑ませるのだ。

フオセツト。——行列がこゝを通るやうな氣がしますわ。

フアベエル。——いや、行列は、街外れを通つてゐるに相違ない。

フオセツト。(扉を半ば開いて。——さうよ、通つてゐるのよ、通つてゐるのよ。家の窓の下を通つてゐるわ。(彼女は両手をうつ。))

フアベエル。(告めるやうな調子で。——フオセツトさん。

ユウゴオ。——何だつて。あの怪物が、僕の隠れ場所までも追ひかけてくるのか。

フオセツト。(恥づかしげに。——おゝ、御免なさい。あなたに厭な思ひをさせたのね。私は考へが足りなかつたわね。

フアベエル。——おきゝなさい。

第三場

同じ人々。

外ではマラーアの葬式の勝どき。

フォセツト燈火を消す。部屋は暗くなる。然し、赤味を帯びた光が、次第に街いつげいになり、家を眞正面から照す。群衆の騒ぎ。濁つた太鼓の音。ゴセツク（譯者曰、始めて音楽練習所を作つたフランスの作曲家。）の音楽。

外に於ける合唱。

「今は、も早、涙を注ぐべき時にあらず。

今は勝利の日にして、名残惜しむ日にあらず、

フランスの最も傑れたる人の遺骸をば、  
われらの喜びの歌をもて見送らん。」

民衆（外で。）——マラーア！ マラーア！ 彼こそ、我々を愛してくれたものだ。おゝ、民衆の受難者！ 一體、お前のやうに誰が我々を愛してくれるのだ。彼が死んだのは、我々の爲めなのだ。復讐だ。ブリツソ黨（譯者曰、シロンド黨にして、ブリツソはその首領、斬罪に處せられし人。）の奴等を殺せ！ ロラン黨（譯者曰、シロンド黨派にして、有名なるロラン夫人はシャコパン山嶽黨の爲めに斬罪に處せられ、その夫も自殺せり。）を絞殺せ！

ユウゴオ。——馬鹿者共！ 僕は窓から飛び出したいやうな気がする。僕は斯う言ふわめてゐる獸めらの齒を折つてやりたい。斯う言ふ汚ららしい赤帽黨の奴を。（譯者曰、大革命時代の過激黨を赤帽と言ふ。）

民衆（外で。）——エルニオの首だ。ベシオンの首だ。（譯者曰、上述の人々は皆シロンド黨にして大革命の時悲惨の死を遂げたり。）ユウゴオの首だ。

ユウゴオ。——俺の首だつて！ それをとるには、高價な値を拂はなけりやならんよ。(濁

太鼓の音。沈黙。混乱したうなり聲。赤い光大きくなる。)

フオセツト。——炬火！ 槍！ 隊の旗！ (窓の所に、槍の先現はれる。)

フアベエル。——市會議員だ！ クラブ員だ！ 憲法議會の委員達だ！

民衆。(外で。)—憲法議會萬歳！ コルドリエ俱樂部員萬歳！ (譯者曰、コルドリエ俱樂部

はマラア、ダントン、デムウラン等によりて創設せられし革命會にして、後にジヤコバン黨

と相合ヤリ。(ピヨオ・ヴレンヌ！ コロオ・デルボア！ 共和國の礎！ エベエル！

エベエル！ (譯者曰、以上の人々皆過激共和黨の名。)'ベエルデュツシエヌ'(譯者

曰、エベエルの編輯せる過激新聞の名)は素敵だ！ 貴族主義者を殺せ！ 彼等をや

つつけろ！

ユウゴオ。皮肉に。——王は死んだよ！ 王萬歳だ！

フアベエル。——マラアはなくなつたかも知れぬが、彼の後繼者は、いつでも出てくる

仕度をしてゐる！

フオセツト。——あの人達を何をついでゐるのでせう。

フアベエル。——マラアの風呂桶です。

フオセツト。——そして、あの材木は？

フアベエル。——知りません。あゝ！ 彼が文房具をおいた臺です。

フオセツト。(笑ひ乍ら。)—まあ、矛盾した戦利紀念ですわねえ。

ユウゴオ。——笑ふんぢやない、あいつから血が滴つてゐるよ。斬首人の臺よりも、多く

の人間の頭が、此臺の上でころがつたのだ。

フアベエル。——そら、短刀だ。

ユウゴオ。——勝利者！

フアベエル。——死人を殺した短刀だ！

リュツクス。——シャルロットが手に持つてゐた短刀！

民衆。(外で。)—マラアに光榮あれ！

ユウゴオ。——あゝ、マラアを殺し乍ら、彼らはその勝祝ひをしてゐる。(群集に戦慄起る。

ゴセツクの凄い進行曲。ありやあ、何だらう。

フオセツト。(窓にかきみ、驚いて後ろへ退く。)—あゝ！  
ユウゴオ。—あれは彼か？

フオセツト。—見ちやいけなくつてよ、見ちやいけなくつてよ。

フアベエル。(見乍ら。)—車だ！ 彼は半分裸かだ！ 生きてゐるやうだ……傷口が開いてゐる……(彼らは、本能的に部屋の奥に退く。炬火に輝いた光を投げ、正面の壁の上にゆらめく。光は、だん／＼少しづつ、部屋の奥まで達し、彼らは、暗がり求めて、逃げかくれる。葬式の進行曲の音につれて、マラアは、凄光を浴び、車にのせられ、月桂樹の冠をし、半身をあらはにして出現する。その顔は、追放者達の方にむけられて、口をこわばつた笑ひにれぢくらせて、彼らを見てゐるやうに思はれる。彼らは、我れ知らず、恐怖の叫びを發する。それが、群衆の戦慄を長びかせる。)

フオセツト。—私をかくまつて頂戴。おゝ、こわい。(彼女はユウゴオの腕の中に、身體をぢめる。)

ユウゴオ。—シラア、貴様には俺が見えるか。貴様が探してゐる人間は俺なのか。……

貴様の死骸を蘇へらせる爲めに、貴様は俺の血を飲まうと欲するのか。笑ふのを。

やめろ。眼をあちらへ向けろ。(譯者曰、シラアは昔のロオママの勢力ありし獨裁官の名止

マリウスの敵となり、敵黨を放逐せり。)

民衆。(外で。)—おゝ、血まみれの心臓！ マアラの神聖な心臓！……………

ユウゴウ。—泥まみれのシイザアを、死骸晒場にやれ！

フアベエル。—靜かにし給へ。涅槃が通ほつてゆくのだ。(沈黙。外では遠ざかり行く音楽

上りゆく薫香。車は、こくゆつくりと過ぎ行く。マアラは姿を没する。)

遠かり行く合唱隊。

『民衆よ、マアラは死せり。祖國の愛人にして、

汝の友、汝の支持者、苦めるもの、希望たらし人は、

汚れたる悪徒の打撃の下に倒れたり。』

泣け、然れども、彼の復讐をすべきことを忘るゝ勿れ。』

民衆。(遠方にて。)——民衆の友に光榮あれ！ (喇叭の音。)  
ユウゴオ。——獸を粉碎してやらうぢやないか。

## 第二幕

田舎にて

市廳の大廳間。——海に面したるバルコンには窓。群衆と戦争の騒音。

## 第一場

ド・マイイエと數人の王黨の友達。

ド・マイイエ。(眺め乍ら。)——また、もう一軒家が焼けてゐるね。

第一の王黨。——古るい港が火に焼けてゐます。



ド・マイイエ。——砲撃が倍加して来た。

第一の王黨。——ジャコバン黨は市街を焼き拂はうと誓つたのです。

ド・マイイエ。——一揆が起らうとしてゐる。人民は、今迄は、あれ程丁寧な追放者を迎へたのだが、その爲めに自分達の身の上に不幸の振りかゝつて来たのをこぼし始めてゐる。もし、我々が今日、決定的の勝利を得ないなら、我々の味方たるジロンド黨はひどい目に會ひはしまいかと俺は恐れる。

王黨。——ド・マイイエさん、あなたは、三色旗に對して、するぶん熱中してお出ですね。

ジロンド黨が勝たうが。ジャコバン黨が勝たうが、我々にとつて、何になります。

ド・マイイエ。——俺は彼の黨が、一つづゝ亡びてゆくのを望んでゐるのだ。今の所は、ジロンド黨を利用しやうぢやないかね。イギリスの艦隊は近いて來てゐる。艦隊は我々に王黨の援兵を運んで來てくれるんだ。あの方が、自分で、それを指揮してくるのだ。彼らは、港に這入る爲めに、只合圖を待ちうけてゐるばかりなのだ。

王黨。——で、あなたは、ジロンド黨が彼らの爲めに門を開いてくれるものと信じてゐら

つしやるのですか。彼らにはそんな氣もないやうぢやありませんか。

ド・マイイエ。——彼らも、切ばつまればさうするだらうよ。(彼は、フォセットがやつてくるのを見て、黙すやうに合圖をする。)

## 第二場

同じ人々。フォセット。

フォセット。——皆様、今日は。嬉しい噂さでもありません。ユウゴオさんから何か便りがありましたか？

ド・マイイエ。——あなたの御友達は、まるで獅子のやうに戦ひましたよ。只今も、ジャコバン黨の襲撃を撃退しました。もう少しすると、あの人はこゝへ來ますよ。

フオセツト。(両手をうつ。)——わたし、あの人に會ひに行きますわ。

ド・マイイエ。(彼女を押し止めて。)——あなた出ては行けませんよ。

フオセツト。——何故でございますの。

ド・マイイエ。(窓を示して。)——あなたの身に危険が振りかゝるでせう。

フオセツト。(群衆の騒ぎに耳を傾けて。)——まあ、ほんとうね。あの人は、誰に對してそんなことをするのでせう。

ド・マイイエ。——あなた達にです、奥様、あなた達や、あなたの味方に對してです。

フオセツト。——それや、ほんとうのことですの。私達をあつやうに歓迎してくれた善良な人達が。

ド・マイイエ。——彼らは、あなた達と一所になつて危険な目にあつたことを、寛恕しないのですよ。

フオセツト。——あの人は我々のやうに共和主義者ではなくつて？

ド・マイイエ。——女市民さん、あなたは共和主義者なんですわ。

フオセツト。——ええ、私は全く共和主義者なんですわ。

ド・マイイエ。——あなたがさうだとは驚きますね。

フオセツト。——如何してせう。私は善良な愛國者のやうには見えないのでせうか。

ド・マイイエ。——あなたは餘り綺麗過ぎますよ。

フオセツト。——綺麗であつて、それで祖國を愛することが出来ないものでせうか。

ド・マイイエ。——もつとよくなすべきことが澤山ありますよ。

フオセツト。——あなたは、世間並みの人と同じなのね。私を眞面目におとりにはなりませんのね。まあ、あなたは間違つてゐらつしますわ。私は、共和主義者よ、そして、共和主義者であることを誇りにして居りますわ。

ド・マイイエ。——一體、こんな乞食政府の中で、何があなたの御氣に召したのです。

フオセツト。——私は政府を支配してゐると考へて満足して居りますの。

ド・マイイエ。——あなたが？

フオセツト。——私がよ。人々のすることは何でも、戦さでも、法律でも……

ド・マイイエ。——斷頭臺ら……

フオセツト。——斷頭臺もよ、何故さうしちやいけないんですの。あらゆるものは、皆幾分かは私の仕事ですわ。私はそれに少しは與つてゐますわ。それで、私は肩身が廣いやうな氣が致しますの。

ド・マイイエ。——そりや、くだらない趣味ですよ。あなたは、あらゆる政體に於いても、いつも氣まゝに男を鼻で指圖するやうな能力がおりにならなかつたのですかね。そして、今迄それがもつと面白いことぢやなかつたのですか。着物や、優美や、戀愛のなまめかしさや。ねえ、考へて御覽なさい。あなたのやうな方は、王様を戀人にもつたことも出來たのですよ。

フオセツト。——ふとつちのカベさんですか。(譯者曰、カベはルイ十六世の渾名なり。)ありがとうよ。私は私のいゝ人の方がよつほどよくつてよ。おゝ、おかしい。

ド・マイイエ。——あなたは過激共和黨の中で一番愛くるしい人ですね。

フオセツト。——まあ、どうぞ黙つてゐて下さいましね。(騒ぎは大きくなる。彼らは窓の

所で眺める。)

ド・マイイエ。——一體、彼らは誰れを追跡してゐるのでせう。あゝ、ありや、シャルロツトの戀人ですよ。

フオセツト。——可愛さうなりユックスさん、あの人達はその人に石を投げつけてゐますわ、殺さうとしてゐますわ。助けに行つて頂戴。(數人の王黨、走り乍ら出る。)

ド・マイイエ。——彼は身を禦がうともしない。人々は彼の顔をなぐつてゐる。

フオセツト。——おゝ、悪者、恐しい人達……あゝ、人々の手から、あの人は救はれた……王黨。——彼らが追つかけて來ます。這入らうとしてゐます。

ド・マイイエ。(窓にかどんで、叫び乍ら。——門をしめる。よし。さあ、もう助かつた。

フオセツト。——あの氣狂の五六人の人が、あの人にしがみついてゐるわ。

### 第三場

同じ人々。リュクツス。彼の後を追つて、數人の狂氣になつてゐる人々が、わめき叫んでゐる。

その中の一人の又は、子供を抱いてゐたが、人々はやつと彼からうき離し、外に追ひのける。

フオセツト。——リユツクさん、怪我をなすつて？

王黨。(群衆を追ひのけ乍ら。——あいつ等は、つかんだ手を離さうともしない。

リユツクス。(彼を罵る怒り狂つてゐる人々に。——君達はどうして僕をうつのかね。(群衆  
彼に對して怒號する。僕は君達にいふことをしてやらうと思つて來たのだ。君達を災  
難から守つてやらうと思つて來たのだ。

女。(冷笑し乍ら。——私達にいふことをしにつて、いふことをしにつて。そのいふこと  
言ふのは、私達を滅ぼすのだよ、私達を殺すのだよ。此上に、どんな悪事で、私達  
を害さうと言ふんだい。(人々、彼らを戸につきまばす。)

リユツクス。——彼らは何を言つてゐるんです。

フオセツト。——あなた血が出てゐるわ。いふのよ、私が縋帶してあけるわ。

リユツクス。——いふことは、彼らを滅ぼす……」

フオセツト。——あなた苦しくつて。

リユツクス。——僕が苦しんで取つた凡てのものは、それ丈、他の人々から奪つたものと  
なるやうな氣がします。だが、彼らは何故僕を憎むのでせう。此女は、何を言はう  
としたのでせう。

フオセツト。——何でもないのよ。さあ、こゝへ腰掛けなさいよ。女と言ふものは、自分  
の言つたことを知つてゐるものですか。まあどうなすつたの。

リユツクス。(大砲の音を聞いて、戦慄する。——あの砲撃を聞く度に、僕は身を切られる  
やうだ。いつも、僕には不幸な人が喘いでゐるのが聞える。

ド・マイイエ。——害よりも、音の方がひどいですね。五十發打つて、やつと一發當るん  
ですよ。

リユツクス。——彼女のしたことは、こんなことではないのだ。彼女は、只一人で、自分  
の身を危険に晒した。彼女は他人を危険に晒したことはなかつた。

ド・マイイエ。——一體、誰のことなんです。

フオセツト。——あなた、そこに何を持つてゐらつしやるの。メタルなの。

リュツクス。——いゝえ。

フオセツト。——屹度、シャルロットよ。おゝ、御覽なさい、あの人は顔を赤くしたわ。

……まあ、あなた、眞面目くさつて戀してゐらつしやるの。

リュツクス。——僕を苛めないで下さい。後生です。

フオセツト。——私、あなたを苦しめやうなんてちつとも思はないことよ。あの人は勇敢な娘だつたわ。私だつて愛してゐてよ。あのマラーの怪物が、あの人の戀人を殺したのだけ。あの人がそれで巴里まで来て、仇をうつ<sup>●</sup>のよ。そりやあ立派なことですわ。私だつて、もし、誰かユウゴオさんに手でもふれたら、そんなことをし兼ねないやうに思つてよ。でも、私はあの人のやうに、眞裸かの男の胸に短刀を突き立てられるか如何か解らないわ。おゝ、あの人には勇氣があつたわね。

リュツクス。——フオセツトさん、一體、そんな馬鹿けたことを、誰があなたに言つたのですか。

フオセツト。——私が馬鹿けたことを言つたつて！ 一體何ですの。

リュツクス。——彼女がマラーを殺したのは戀人の復讐をする爲めだなんて。

フオセツト。——そりや、本當のことぢやありませんか。

ド・マイイエ。——あの人はやきもちを焼いてゐるんですよ。

リュツクス。——おゝ、そんな恐しい言葉を言はないで下さい、私が愛してゐる人に嫉妬を起してゐるのなら、私は自分を唾棄します。嫉妬！ <sup>●</sup>これは自分の爲に幸福をしまつておかうとすることだ。辱ぶべき疑ひで自分の信仰を汚さうとすることだ。いや、僕は、あの人を、他の女並みに引き下ろす噂をきくことが切ない、あの人の犠牲的行爲を、つまらん戀愛話にして下ふことは切ない。

フオセツト。——これがつまらない話なんですつて？ 私、非常に立派な話と思つてよ。

……ぢや、あの人は戀人を持つてゐなかつたと言ふの。あなたはそう信じてゐらつしやるの。何と言ふ御氣の毒なことね。それぢや、あなたはあの人と知合ひだつたの？ 前にあの人に會つたことがあるの？

リュツクス。——僕は彼女と話が出来たのだつたなら、どんなものでも惜まないでせう。

ド・マイイエ。——そんなことをわざ／＼しないでも、僕は幾度もそう言ふ幸福を得ましたよ。

リュツクス。——あなたは彼女に會つたことがあるんですか。

ド・マイイエ。——カアンのあの人の両親の所で、屢々會ひました。

リュツクス。——あなたは會つたのですか。あの人はあなたに話したことがあるのですか。

ド・マイイエ。——勿論です。(リュツクス近づき、ド・マイイエの方に身をかがめる。)何をなさるのです。私の袖を接吻なさるのですか。

リュツクス。——赦して下さい、赦して下さい、僕は見ました……

ド・マイイエ。——何を。

リュツクス。——僕は彼女の身體があなたの周圍に浮んでゐるのを見ました。

ド・マイイエ。(皮肉に)。——私が今は聖人の御光を共にうけてゐると言ふのですか。

リュツクス。——お、僕がこんなことをしたのは、あなたの爲ではありません。僕があ

なたの中の唯彼の人の面影のみに敬意を拂つてゐるのです。

ド・マイイエ。——その無禮な御言葉は何です。

フオセツト。(笑ひ乍ら)。——御怒りになつちやいけませんわ。あの人は何もわざと言つた

譯ぢやありませんわね。あの人は、非常に面白い人なのよ。

リュツクス。——あなたがあの人と御知合になられた時、あの人はどんな様子をしてゐたか仰つて下さい。

ド・マイイエ。——ダルモン嬢のことですか。あの人は、大きな人でそまつな着物をきてゐて、可なりしつかりした身體をして、頭は前にかゞんで居りました。外見は氣持のいい人で、眼は少し曇つてゐたけれど、切れ目の長い眼でした。あの人の最もいゝ所は、その顔色でした。殊によくありがたつたのですが、顔を赤くする時に、すつかり透き通ほるやうになりました。そして、その聲音には、音樂のやうな優しさがありました。音樂は、言葉よりもいゝものでした。あの人の會話は、引用が多くて哲學的でありました。でも、あの人は、口數も少い方でした。心の中を開かさ

ない人で、氣位の高い人でした。貧乏な娘で、零落した田舎貴族の出の家で生れて母親は目つがちで、妹はせむしで、自然からは、みぢめな目に合はされてゐました結婚が出来ると言ふ望みはなく、不足がちな生活を送つてゐました。それで、こんな昔の話をすると頭を反むけてました。あの人は、すばらしいことをしやうと思つてゐられたのです。あの人はうまくやりました。——如何してあなたはお笑ひになるですか。

リュックス。——あなたの仰ることをきいてゐると、僕は、あの人の苦しんでゐた、悪意ある愚かさの零圍氣の中に生きてゐるやうな氣がするのです。僕はあの人と一所に苦しみます。そして、それが僕にとつて氣持がいいのです。

ド・マイイエ。——私はちつとも、ダルモン嬢に悪意なんか持つて居りませんよ。私は誰とも同じやうに、あの人を讚美してゐるのです。

リュックス。——おゝ、あなたはあの人を誹謗しやうとなさるのです。

ド・マイイエ。——如何してです。

リュックス。——自分の愛してゐないものゝ悪口を言ふ前には、とかく、こんなことをやりたがるものです。

フォセツト。(笑ひ乍ら)——おゝ、リュツリスさん。あなたがそんなことを考へてゐらつしやるとは、誰れでも思ひつかかなかつたわ。

リュックス。——どうぞ、後を言つて下さい。ちつと、あの人のことを、僕に話して下さい。

ド・マイイエ。——私はそのことを悪く言ふと言ふのですから！

リュックス。——悪く言つても、構ひません。僕はあなたの仰る言葉の奥底を見透しますから。あなたはあの人の言つた言葉を何か覺えていらつしやいませんか。

ド・マイイエ。——あなたは、あの人の皮肉だつたことにびつくりなさるでせう。嫌に思はれるでせう。

リュックス。——あの人は嘲けるやうなことをしたとしても、非常に苦しまれたに違ひありません。あの人は、僕よりもつと苦まれたのです。

ド・マイイエ。——私はあの人が、何黨であつたかは少しも知りませんでした。あの人の父親と兄とが、コンデ軍（譯者曰、革命に逃げたる王黨、即ち移住者を以て、コンテ公爵の組織したるもの）に参加しましたが、あの人は常に移住者を嘲けつて居られました。そして、あの人は、共和國をも信じてるませんでした。我々が斯かる幸福をうける價值のあるものとは、少しも思つてゐられませんでした。我々が餘りに輕挑で、餘りに腐敗してゐると思つて居られたのです。やつと修道院を出たばかりの寄宿生徒のやうな皮肉な嚴格主義を抱いて居られたのです。自分の純潔を變ずる僕れがあるからと言つて、ブルテルや、ルウソオを決して讀まうとはなさいませんでした。リュックス。——さうです、さうです……あゝ、僕はどの位あの人を愛して居るだらう。ド・マイイエ。——所がね、あなたは、あの人の傍に居らつしやれば、時間を空費される丈だらうと思ひますね。あの人は、戀愛や結婚などには、病的な嫌惡を持つてゐられたのですよ。

リュックス。——自然の卑しむべき暴力に對して、氣位の高い魂が反抗することを、決

て嘲けつてはなりません。

フォセツト。——リュックスさん、自然はあなたに何をしたんですの。あなたは、愛にどんな反感を持つて居らしやるんですの。その譯を私に言つて頂戴。シャルロットの前に、一體誰をあなたはお愛しになつて。

リュックス。——誰もありません。

フォセツト。——そんなこと嘘よ。あなたは、もうこんな年ですもの……さあ、おいくつでせうね……四十五？

リュックス。——四十九です。

フォセツト。——四十九ですつて。あなたは四十九にもなつて、今迄人を愛したことがないのですつて。

リュックス。——僕が一瞬間も愛せずに生きて、どうするもんですか。愛なくしては、魂は呼吸することが出来ません。……僕は、存在する一切のものを愛してゐたのです。



フォセツト。——御立派な愛ね。私の言ふのは、そんな愛ぢやないことよ。情人のことよ、あなたは、今迄、それを御持ちになつたことはなくつて。

リュツクス。——そんな風に、僕を見つめてはいけません。

フォセツト。——何故ですの。

リュツクス。——あなたは私に赤面させやうとなさるんです。

セツオフト。(笑ひ乍ら。)—おゝ、罪のない人ね。何てをかしな人だこと。けれども、それぢや、あなたは、ドイツの御國で、何をしてゐらしやつたの。そこでは、みんなあなたみたやうなんですの。

リュツクス。——僕は、マイヤンスの附近の田舎に住んで居りました。僕には都會は餘り苦痛すぎらんです。人を羨望することや、憎惡を含んだ争ひは、僕に痛みを與へます。僕は一つの農家を持つてゐました、そこへ、多年の間、鋤と木をもつて、引込んでゐたのです。

フォセツト。——まあ、そんな所にゐちや、私は退屈で堪らなくなるでせうよ。

リュツクス。——僕一人きりぢやありません。僕にも交際社會がありました。ブリユタルクの神聖な魂や、ボルシア、コルネリイ、クレリイと言ふあの質素な崇高な婦人なぞです。——そう言ふ婦人達と、あの人も、(譯者曰、シャルロット、コルデエ、こと)矢張一所に暮してゐたのです。——あの人も、同じ時に、修道院の中で、斯う言ふ勇ましい心を持つた姉妹を夢想し、彼女達と共に話してゐたと思つて、私は喜んでゐたのです。深淵のやうな過去の日で、彼女等とよりあつて、我々の魂は、疑ひもなく認め合つてゐたのです。僕は夢の中で、疑ひもなく彼の人の眼に出合ひました。でも、僕が車の上で彼女を見た時、その眼を見知つてゐました。それは始めて會つたではありません。さうぢやない。そうして、僕には全くさう言ふ風に思はれたのです。その眼は、矢張、僕を見知つてゐたのです。おゝ、一瞬間、あそこで、お互ひに出會つた時は何と言ふ喜びと苦しみとに満ちた驚きだつたでせう、——なんと言ふ瞬間だつたでせう。——あの瞬間は、僕の生涯の絶頂だつたのです。その前に存在した一切のものは、それを準備する爲めに作られてゐたのです。その後、起

つた一切のものは、その思出でにのみ作られたのです。これこそ、此哀れなリュックスが、これから如何なる人間になるかと言ふことなんです。消えんとする一つの眼差、青い二つの眼の微妙な光りなのです。

フォセツト。——ちやあ、その眼の中で、あなたはどんな尊いものを御覽になつて？

リュックス。——生ける一つの魂です。

フォセツト。——もつとありふれたものはなくつて？

リュックス。——一世紀に、やつと、三つか四つの魂が生きてゐるものです。

フォセツト。——そして、他の魂は？

リュックス。——それは生きてゐるやうに見える丈です。

フォセツト。——リュックスさん、それぢや、私は、如何して、生きてゐないのでせう。

リュックス。——勿論、生きてゐないので。あなたが何を欲するか、何をなさんとするか、一瞬の中に、どうならうとするか、あなたは御存知ですか。あなたの眼は小川のやうなものです。如何なる考も、そこに宿つては居りません。凡てのものは、常

に移り變つてゐます。

フォセツト。——私の眼に何物もないのなら、あなたが此眼を御覽になる時、どつして赤面なさるのか、私知りたいわ。

リュックス。——僕の怖れるのは、あなたではありません。あなたの中で恐れるものは。

自然なのです。あゝ、待伏せしてゐる猫のやうに、常に獲物をあさつてゐる、陷阱に満ちた、狡猾な不明瞭な此自然！ 暗黒の中から、恐ろしい氣狂ひじみた姿が飛び出すのを見て恐れおのゝく彼の奇怪な森！ ……さうです、あなたは僕をからかつて居られるのです。此悪魔に満ちた自然を、あなたは僕のやうに知つては居られないのです。

フォセツト。——それぢや、あなたは自然を恐れるなら、何故、田舎に住んでゐらしたの。

リュックス。——深淵の恐怖が僕を引きつけたのです。互ひに貪り食ひ合ふ此世界の混戦に黙つて立ち合ひ乍ら、恐れてゐる目撃者として、僕はちつとして生きてゐたので

す。僕は抵抗をしませんでした。あらゆる生命の汁を吸ひ合はうと渴望してゐる猛々しい此世に、死人のやうになつて僕は身を任せて居りました。そして、革命の報知が響いた時に、僕の牢獄の扉は開かれ人間は自然の鎖を切り放ち、自然を愛の約束に制肘したやうに私には思はれました。然し、自然は我々を欺きました。彼は、自ら服従することを装ほひ、邸の凡ての鍵を自分に渡してくれるやうにしたのです。そして、我國では今は悪人の召使ひが、主人となつて居ります。そして、世界は、彼の忌まはしい笑劇の玩具となつてゐるのです。

フオセツト。——でも、ねえ、親愛な氣狂ひさん、私を見て下さいね。私のやうな善良な娘が、斯う言ふ凡べての恐ろしいことに對して、どうして同じやうに出来ませう。リュックス。——罪のない人々に於いて程、僕は何處へ行つても、こんなに自然を恐ることをありませんよ。何故と言つて、罪のない人々は、全然、自然に引き渡されて了ふのですから。

フオセツト。——あなたは、御自分の臆病さで、遂々、私が自分自身を怖がるやうにしやうとなさるのね。

リュックス。——僕は卑怯者ではありません、僕は自然を怖れてゐるのです。人間を恐れてやしません。人間の意志なんか、こくつまらん物です。こゝにもさう言ふ人はありますが、前から見つもつて悪事をしやうと思ふものなんか、僕は少しも恐れてやしません。

ド・マイイエ。——え、リュックスさん、何處にですつて？

リュックス。——あなたはよく御存知の筈です。

ド・マイイエ。——リュックスさん、あなたは、私を何と思つてゐらつしやるんです。私も矢張り生きてゐないと言ふのですか。

リュックス。——おゝ、あなたは、他の人々が生きてゆくのを妨げやうとなさるのです。

ド・マイイエ。——そんなことを、何を仰るのです。

リュックス。——他の人々の信仰は、あなたの妨げをしてゐるのです。あなたはその信仰を殺さうとなさるのです。

ド・マイイエ。——如何してぞす。私はあなた達の戦ひに、聯盟してゐなかつたとも言ふのですか。私が、あなた達を守る爲めに、自分の生命を危くしてゐないのですか。……如何して、あなたは笑つてゐらしやるのです。

リュックス。——あなたはよく御存知でせう。

ド・マイイエ。——それぢや、あなたは何故私がこゝに居ると思つてゐられるのです。

リュックス。(落ち着いて。——勿論、我々を欺く爲めにです。

ド・マイイエ。(狼狽し、次ぎに怒つて。——そりや、冗談が過ぎますよ。

リュックス。(眞面目に。——おゝ、御免なさい。僕は何もあなたを怒らせやうと思つたのではないのです。ですが、あなたの御思召は、そこにあることは本當ぢやないのですか。

フオセツト。(窓に走りよつて。——おゝ、私のいゝ人が来たわ。いゝ人が来たわ。人々があの人を歡呼してゐるわ。

王黨。——人々はまた彼を少しはけなししてゐるやうですね。

フオセツト。——そんなことはなくつてよ。何と言ふことを思つてゐるのでせう。……ヌ

ウゴオさん、ユウゴオさん！ (彼女は窓から接吻を送る。)

王黨。——群衆は怒つてゐる。彼らは、その中を突き通つて、道を切り開かねばならないのだ。

ド・マイイエ。(気が、りになつて、眼を地に据ゑつけてゐるリュックスを眺める。彼に話をしやうと思ふけれども、躊躇する、次ぎに。——リュックスさん、あなたは、如何して他人の考を見透ほすことが出来るかと主張されるのです。あなたは他人を見ても居られないのに。

リュックス。——僕の中には他人の眼付がうつつてゐますよ。僕が一度でも他人を見たらその魂が僕の心の中に流れてくるのです。外觀で打ち消さうとしても、僕はちやんと其を藏つて居きます。僕が眼を閉ぢても、僕にはあなたが見えるのです。

ド・マイイエ。(困つて、遠ざからうと一歩歩るき、それから歸つて来て、座り乍ら、話することに決心する。——リュックスさんあなたの御意見によると、私のやうな人間は、如何す

ればいいのですか。

リュッククス。——未來が例へ暗く恐ろしくあつたとしても、決して、過去の重みでもつて未來を殺してはならないのです。

ド・マイイエ。——だが、愛するものが過去であり、嫌つてゐるものが未來であると言ふことを何で見わけることが出来るのですか。

リュッククス。——眞面目になつて下さい。あなたは、本當にあなたの目的を信じては居られないのです。あなたをそれに結びつけて居るのは、利益であり、習慣であり、變節の不可能のためなのです。自ら欺いて何の益がありません。破滅の時間を長びかせるといふことは何の益もないことです。そんなことは、見じめです。自分の老いてゐることを否定せんとつとめる老人のやうです。

ド・マイイエ。——でも、此過去から抜け出ることが出来ないとするれば、過去の中にのみ生きる事が出来るとするれば、それが我々にとつて全部であるとするれば？

リュッククス。ト……それぢや、死ぬべきものです。

ド・マイイエ。——戦はずに？

リュッククス。——一箇の存在、一個の世界が、その時を終つたのなら、讓歩して、黙して姿を消すのが、勇敢と言ふものです。

ド・マイイエ。——いや、決してそんなことはない！

#### 第四場

同じ人々。ユウゴオ、ファベエル、及びその味方遣入つてくる。外には、喝采と嘲罵の聲。フオセツトは、ユウゴオを接吻しに駆けつける。

ユウゴオ。——是ら馬鹿者共の眞中を、サアベルをかざして、道を開けさせねばならぬ時が来るのを認めた。馬鹿者の畜生奴！ 俺はあいつらの誰かを虐待したのかも知れ

ん。

ド・マイイエ。——總代、私はあなたの勝ち戦をお祝ひ申します。

ユウゴオ。(フアベエルを指して。)——祝ふべき人はあの人だよ。堡壘の大砲が、ジャコバン黨を逃走せしめたのだ。

フアベエル。——彼等が襲撃を返しに来るのは、間もなくだらうよ。

ユウゴオ。——彼らが我々に與へてくれた猶豫時間を利用しやうぢやないかね。人民に對して如何言ふ手段をとつたらいいか。僕は零圍氣に反抗のあるのを感じる。

ド・マイイエ。——先刻も、彼らは危くリュックスさんに傷を負はせやうとしました。砲撃をうけると言ふ怖しさで、血迷つたのです。

ユウゴオ。——僕は此憎むべき意地悪の人民を後ろにしてゐると思ふより、二箇の軍隊と戦つた方がいいと思ふがね。

フアベエル。——彼を穩かにしておくといふよ。もし、何か起さうとすれば、僕が砲臺の上から、彼らを粉碎してやるから。

ユウゴオ。——君は、町を攻撃すると言ふのかね。

フアベエル。——仕方がなければ。

ユウゴオ。——我々はこんなせつばつまつた羽目に陥らないやうにしたいものだね。

フアベエル。——何でも見越してしなければならぬ。

ド・マイイエ。——あなたの部下は、服従しないでせう。

フアベエル。(微笑し乍ら。)——僕には服従させる手段があるのですよ。

ド・マイイエ。——どんな手段です。

フアベエル。……彼らが暴動を起したならば、僕は彼らを撃ち殺してやります。彼らにびつくりした身振りをする。靜かにして下さい。彼らは暴動なんか起しやしません。

フォセツト。——おゝ、フアベエルさん、そんなことはしないで下さい。私は氣狂ひになつて了ひますわ。

リュックグス。——まあ、こんな戦争を全くしやうと思はなかつたあなたが、味方をするのを躊躇したあなたがそんなことを。

フアベエル。——行動をとる前の外は、躊躇することは許されないんだ。

ユウゴオ。——君の言ふことは全くだ。だが、人は思ひがけない悪いことをするものだね。

フアベエル。(微笑 乍ら。)— 僕の年頃になれば、少しは、悪を悲んだり、悪をしたりすることに馴れるもんだよ。(リュツクス、怒ろしくなつて、「背中をむける。’) 我が善良なリュツクス君、僕は君の意に叛いたことをしますよ。え、え、だが全くの所、悪をするよりも、善をする方が氣持が楽ですねえ。(リュツクス遠ざかつて、部屋の隅にひっこむ。彼はそこで、第六場まで綴いた議論をよそにして、考事にふけてゐる。)

。マイイエ。——人民は煽動者で動いてゐるのです。我々は、ジャコバン黨の探偵で、將校に假裝した奴を捕へました。彼は、憲法議會の委員から市廳に送つた手紙を持つてゐました。人々は謀叛を起すやうに訴へてゐます。あなた達の首に懸賞をかけてゐます。

王黨。(這入り乍ら。)(作者曰、此より次ぎの頁に第六場、「王黨」人々が町中で戦つてゐる。』まで、實演の時は切断したり。)— 市長と市吏が、總代と話しをしたいと言つて居ります。

## 第五場

ユウゴオ。(マイイエに。)— 彼らは、あの手紙を知つてゐるのかね。

ド・マイイエ。——我々は、あの手紙は破いて了ひましたよ。ですが、多分、人々の彼らに手紙を送つたのは、始めてぢやありませんまい。

同じ人々。市長及び市吏。

市長。——市民、戦ひで疲れて居られる所へ、我々が謁見を乞ひ、恐らく君の苦勞の程を増すことになるとしても、許して下さい。今の場合は危急の時です。市は砲撃を蒙り始めてゐます。多くの家屋が焼けてゐます。こゝから、君にもその焰が見えませう。

フアペエルの。(見ながら。)—え、彼らの砲撃はうまいですなあ。

市長。——それで、人民は騒いでゐます。そして、元の港では、反亂が起ると噂してゐます。貧乏人は、金持の爲めに苦しむのは厭だと言つてゐます。金持の方では、またサン、キユロット黨(譯者曰、過激共和黨即ちジャコパンのこと。)の復讐を心配してゐます。リヨンの例が、警戒する爲に、作られてゐるのです。それで、我々は、我々の町から、戦争の危険を遠ける方法はないかと、君達に御願ひに上つたのです。

ユウゴオ。——方法は一つしかありませんよ、戦ひに勝つことです。

市長。——それは、我々によつて出来ることではありません。

ユウゴオ。——それは我々凡ての熱心によることです。

市長。(困惑して。)——ねえ、市民、我々は非常に君達に同情してゐるのです。立派な人で、正直な人で、また誓つて言ふが、善良な共和黨である君及び君の同僚の爲めに、一切のことがうまく行くことを我々は非常に喜びませう。我々は、君達と議會との間に誤解の生じたことを御氣の毒に思ひます。そして、君達がそれをなくすやうに成

功されることを望んでゐるのです。のみならず、君達は我々をよく知つて居られる我々は、最善をつくしたこと、我が市は、君達をよく迎へて、食料をやり、宿をかき、接待したことを。君達は我々に不平を言はれる道理はないのです。君達は我々に苦痛の招くやうなことは欲せられない筈です。我々は既に君達の爲めに、大變、損害をうけました。市民、ねえ、御解り下さるでせう。……要するに、一時、まあ、……その……他へ行かれるやうに賛成して下さいれば、……まあ、實際のところを言へば、さうして下さると我々を喜ばして下さいませう。

ユウゴオ。(己れ、抑へつけて。)——で、君達は我々を引き渡されるのです？

市長。(叫ぶ。他の人々手を空に上げる。)——いや、いや、さうぢやない、さうぢやない、君は我々の感情を譏誣される。我々は心から君達の味方です。いや、我々は君達をもつとよく隠してくれる場に赴かれるやうにと、小舟や小さい蒸汽を用意して上げませう。政府に不正なことが少しもないと言ふのぢやない。君達は政府と戦つて悪いと言ふのではありません。だが、それは、君達御自身に關すること、我々の關



することではないのです。君達は、我々の指導者です、我々を指導して下さい。君達の成功を見るのが何より、我々の欲するです。君達があの賤民共と戦ふ時には（彼は自分の膝をたたく。我々を信頼して下さい。）

ユウゴオ。——君達は恥づかしく思はないのですか。君達は、多分、此恐るべき戦ひに加はらないで見てゐる言ふのでせうか。君達を我々から引き離す奴は見ちめな奴です。我々は君達の爲め、君達の自由の爲めに戦つてゐるのですぞ。

市長。（頭をふる。）——おゝ、おゝ！（彼らは、冷笑し乍ら見合ふ。）  
ユウゴオ。——君は何を笑ふのです。

市長。——さあ、我々は欺かれて居りませんぞ。君達は法律の保護を取り消されてゐる。君達は、自分の頭をつなぐ爲めに戦つて居られるのだ。そりや、當り前すぎる事です。そして、君達の爲めに、我々をも戦はせやうとしてすゝめて居られることも知つてゐます。それが出来ることなら、願つてもない事です。だが、君達の戦ふのは、我々の爲めだなどと言つちやいけません。革命は成就したのです。我々は我國

の主人となつてゐるのです。我々は貴族や僧侶を放逐したのです。我々は彼らの位置にとつて代つたのです。一ヶ月もたゝない前に、我々の欲する憲法が與へられたばかりです。此以上、我々に何が必要ですが、平和です、他のものはいりません。我々を安靜にして頂きたいものです。

他の人々。（同意してつぶやく。）——さうだ、我々に平和を與へよだ。

ユウゴオ。——それぢや、君達は、君達の守護者を守護することはちつともしないのですね。——君は、卑怯な振舞をして、助かりはしないですよ。我々がやられた後は、君達の番ですよ。我々の犯罪と言ふのは、君達の財産を維持し、マラーの虐政から君達を救はうと思ふことなのです。馬鹿者共が、選良を押しつぶして了ふ時は、金持でも、商人でも、中流人でも、彼を支配する凡てのものを食ひつくすでせうよ。君達の首は、ぢき、籠の中へと我々の首の後を追ふことになるのです。

市長。——宜しい、宜しい。後でうまく纏むことは解ります。君達は非常に民衆の爲め心配して居られる。それで乍ら君達が我々を必要としなくなつた時は、大して我々

を思つては下さらないのですね。

ユウゴオ。——君達は力丈しか尊敬されないのでですから、僕の力が破れるまでは、僕の力をうけるのです。僕には君達の市が必要なので、それを守備してゐます。君達が欲されやうとされまいと、僕は止まつてゐるのです。

市長。(物が言へなくなつて。)——君はそんなことはなさる譯がない。そんな権利はないのだ。(ユウゴオは身振で彼を送り出すやうにする。)市民、私はあなたに勧告します……ユウゴオ。——私は敵からしか、勧告をうける者ぢやありません。そして勧告にはこれをもつて應戦します。(彼はサアベルを示す)

市長。——そんなことは出来ることぢやない。君は眞面目に物を言つて居られない。市民！ それぢや、君が我々凡てのものを死に晒してゐると言ふことを考へないのですね。私の首が君の爲めはねられ、彼らが私の金や財産を取つて了ふと言ふことを考へないと言ふもんです……あゝ、困つた！ 困つた！ 君はそんなことはなさるまい。心を寛大にもつて下さい。我々を憐れに思つて下さい。——まあ、まあ、君

はこゝから出て行つて下さるでせう。君が言ひつけに服さないとしても、力づくで出てゆかせませう。私は人民を憤起させてやります。君は謀反人です、共和国の敵です。戦ひだ。(彼は、驚き怒れる市吏と共に出てゆく。彼らの怒れる聲が、階段に聞えるそれから、人民に説いてゐる廣場に聞える。)

## 第六場

同じ人々。市長及び市吏を除く。

ユウゴオ。——あの賤民共が暴動を起さうとしてゐる。先がけをしやうぢやないか。サン。キユロット黨は攻撃を再び開始した。僕は彼らの軍隊と暴動とに、同時に對抗することは出来ない。然し、君の方は、町の中で知られてゐる人だ。人民によく話をし

てくれ給へ。各々皆營所をひきうけてジャコバン黨に抵抗をするやうにして貰ひたい。

ド・マイイエ。——私はあなたに大したお助けは出来ません。私は少しも人望はありません。他の人々は……

ユウゴオ。(中流人の方をふりむいて。)———そうですか。私はあなた達に信頼することは出来ないので。レヌブル君、ロツク・サン・モオル君……

一中流人。(困惑して。)———御免下さい。ねえ、我々は革命黨に向つては喜んで進軍しますが、人民に向つて、我々の民衆に向つて矛をとるなんてことは……厭です。我々は暴動に對する暴動を以てすることは出来ません。

ユウゴオ。———君達もそれぢや我々を見捨てるのだね。

中流人。———總代、そうではありません。我々はあなた達の運命がどんなものであつてもそれを共にします。あなた達は律法を擁護しにお出になつたのです。我々はあなた達と共に、それを擁護しませう。然し、我々を擁護する爲めだとして、法律を破るこ

とは、我々には禁じられてゐるのです。我々が法律を曲げるならば、一體どんな主義の名目を以て、不正行爲と戦ひをつゞけることが出来るのでせうか。

ユウゴオ。———正義の名を以て。

中流人。———私は法律の爲めに自分の生命を捧げたいと思ふのです。私は自分の生命の爲には決して法律を犠牲にはしないでせう。

ユウゴオ。———これが、我々の守備者達か。凡てのものを止めて、我れと己れを束縛し、自分の劍を折り、活動することを知らず、思切つてすることが出来ず、意志することも知らないと言ふ人間がそれか。

中流人。———その人間が死ぬることが出来るか出来ないかは後で御解りになるでせう。

ユウゴオ。———死ぬんだつて！ そりや、非常な卑怯な言葉だ。それが彼らの立派な策なのだ。我々はそんなことはもう通りこしてゐる。死ぬんだつて？ 死ぬんだつて？ 俺は死ぬことなんか嘲けつてやる。勝たなければ駄目です。(彼は味方と共に出てゆく。)

中流人。———法律によつてです。そうでなければ駄目です。(彼は味方と共に出てゆく。)

ユウゴオ。——馬鹿な奴等だ。規則を守つてゐるさへすりやあ、負けても誇りに思つてゐる  
あいつらは自分の所持してゐる主義を駄目にするのだ。斯う言ふ正直者の心配と言  
ふものは、悪人の罪惡よりも、一層惡罪を犯すものだ。

ド・マイイエ。——私はもうあの人達は知り過ぎる位知つてゐます。するぶん前から、私は  
あの人達の中にあつて苦しんでゐるのです。私はあの人達には、激勵をしてくれと  
言ふ外は望みませんでした。——委任することなんかは望みません。あの翌日も、  
私は巴里に進軍して、追放をうけた爲めに憤起した眞先きがけの運動に、田舎の人  
々は私に従つて來ました。然し、私は、直ぐに、熱心を冷却して了ふあの人々の臆  
病な賢明ぶりの折檻をうけました。數週の中に、あの人達は、味方の四分の三の人  
を意氣沮喪させることに成功したのでした。

ユウゴオ。——こいつら皆、けだものだ。肉屋の庖丁に切られる爲につくられてゐるのだ。

フアベエル君、君は何故何にも言はなかつたのかね。

フアベエル。——君の言ふことを聞かないものに物言つたつて、何の役に立つものか。法

律の拘子定規論者は、どうすることも出来ないよ。ありや、理性の盲信者だあね。  
形式と言ふことが、彼らによつて、生きてゐる觀念の位置をとつたのだ。あいつら  
は、仕掛人形のやうな身振りをして、適當の處理をもとらないで、或は忌々しく、  
或時は感動し乍ら、始終滑稽な様子で歩いてゐるのだ。——宇宙や、善の無限の變  
化をば、公證人の拘子定規にあてはめやうと努めたり、必要もないものに規則をあ  
てはめたりして、豫め駄目なことは解り切つてゐる主義に、變てこにも殉ずるもの  
なのだ。法則と言ふのは、憐れみを與へることなのだ。法則は、世界を支配し、そ  
の永久の失敗を支配する全能の必然さのことだ。自分の妙にこせついでゐる氣紛れ  
を、永久の法典にしやうと思つてゐる頑固な寫字生などの落書きに、自然の超人的  
な意志を同化させるなんてことは、——そりや、馬鹿けてゐることだ。書いた文字  
を型通り守るなんて者は、例へ有徳なものでも、僕は厭だ。行動することに、何で  
彼らはおせつかいをするのだ。行動と彼らが結合するのは、若い女と老ほれの結婚  
のやうなものだ。

王黨。(窓で。)(作者曰、こゝにて、實演の最先きに言つた切斷は終る。)—人々は街で戦つてゐますよ。

ド・マイイエ。——人民はだん／＼増してくる。我々の包圍されやうとしてゐます。

フアベエル。——發砲の命令を與へてくれ給へ。廣場を掃射するんだ。

ユウゴオ。——いや、いや、待ち給へ。

フアベエル。——君は何を待たうと言ふのか。

ユウゴオ。(躊躇して。)—我々は遂々、本當にそうするのかね。

フアベエル。(頑固に。)—命令を與へろ。

ド・マイイエ。(窓の傍にゐるフオセツトに。)—窓へ行つちやいけませんよ。打ち殺されますよ。

フオセツト。——私見たいわ。……(彼女が見つゝさかゞんだ時に、一發の銃が、彼女の側の窓硝子をこわす。群衆ごなる。)

民衆。(外で。)—殺せ、殺せ。殺して首を袋に入れてやれ。あのちつほけなブロンドの

女を！ 首を袋に入れてやれ。(譯者曰、斷頭臺にかけた首は袋に入れるなり。)

フオセツト。(氣が遠くなつて。)—あゝ

ユウゴオ。(彼女の所に走つて。)—負傷したのか。

フアベエル。——硝子かけが數片とんだのだ。何でもない。

フオセツト。——助けて。

ユウゴオ。——恐がらなくてもいゝよ。

フオセツト。——行きませう。行きませう。もう、こんな所にゐるのはよしませうよ。

ド・マイイエ。——あなたは、今の先は、あんなに勇敢だつたのに！

フオセツト。——さうよ。でも、そんなことぢやなかつたのよ。あの獸のやうな眼、猛々しい唇！ おゝ、惡い人！ 惡い人！

フアベエル。——ねえ、恐がつちやいけない。まだ、我々はつかまつたのぢやないのですよ。

フオセツト。——フアベエルさん、あなたは物事が御上手で、戦争をよく御存知なのだか

ら、いゝ方法を見つけて頂戴ね。私を救つて頂戴。ユウゴオさん、私をひつばつて来たのはあなただわ。私を殺さないやうにして頂戴。

ユウゴオ。——いゝよ、いゝよ、お黙り。

フオセツト。——恐いわ。私はもう息もつけないよ。私は恐くて死にさうだわ。

リュツクス。(憐れみをたゞへて、フオセツトの傍に来る。)—御氣の毒ですね。

フオセツト。——私を殺さないやうにして頂戴。殺さないやうにして頂戴。

ユウゴオ。(堪え切れなくなつて。)—女の泣き言なんか、悪魔にやつて了へ。

リュツクス。——あの人を可愛さうに思つて下さい。

ユウゴオ。——我々には外にすべき事があるんだ。あいつをもう少し騒がせないやうにするんだ。あいつは我黨の人々の意氣を沮喪させやうとしてるやがる。

リュツクス。——氣を落ちつけなさい。氣を落ちつけなさい。あゝ、あなたは何て泣いてるんです。決して恐がつちやいけません。彼らは悪者ぢやないんです。彼らだつても恐がつてゐるんです。彼らは自分の言つてゐることが解らないんです。

フオセツト。——ほんとう？ あの人達は、私達に害をしないのですつて。

リュツクス。——それは解りません。

フオセツト。——ほんとうのことを言つて頂戴。私達は救はれるでせうか。

リュツクス。——僕は自分の生命を投げ出しても、あなたを助けて上げます。

フオセツト。——あなたの命なんか、私がどうすると思つてゐらつしやるの。そんなことは、私にはどうでもいゝのだわ。私は生きたいのよ。生きたいのよ。……あら、御免なさい、あなたはいゝ方ね。こんなことになつたのはあなたの罪ぢやないのにねえ。……

王黨。(ド、マイイエに低聲で。)—イギリスの艦隊が見えますよ。港の方へやつて來ます。

ド・マイイエ。(ユウゴオに。)—總代、私はあなたに申上げなければなりません。ね、御覽の通り我々は單に暴動に身を防ぐことにすら困難を感じてゐます。我々の單なる兵力を以てしてはあれ程の敵を屈伏させるには、餘りに少数です。……私には一つ救済策があります。

ユウゴオ。——策が？、

フオセツト。——おと、言つて頂戴、言つて頂戴。あなたはその方法を知つてゐらつしやるの。

ド・マイイエ。——我々に残つてゐる只一つの方法です。あなたが御承諾になれば、勝つことは受け合ひます。

フオセツト。——屹度、私達は承諾してよ。

ユウツオ。——その方法が解かるまで待て。

フオセツト。——おと、それよりか、火の中へ飛びこんだ方がいよわ。

ユウゴオ。——話し給へ。

ド・マイイエ。——それは力強い方法です。あなたが、普通一般の偏見から、全然離れると言ふ御思召がないのなら、正直に仰つて下さい。あなたの経験が全く成しとけられないまで、私は待つてゐませう。

ユウゴオ。——え、君は何を待たうて言ふんだ。僕が今のやうな状態にあたつては、死の経験しか、経験のしやうがないぢやないか。

ド・マイイエ。——大事をなすには、大方法をしなければなりません。我々は秩序を立てやうと欲してゐるのです。秩序を愛する凡ての人々に、手をのばさうぢやありませんか。過去の恨みと言ふやうな記憶は無くして了ふぢやありませんか。いよですか。今直ちに、兵卒や、武器や、彈藥や、金錢や、あらゆる種類の援助を得ることの出来る方法は一つしかありません。マンシユ(譯者曰、フランスの英國の方に突き出てる半島)の對岸の義侠的で公平な我が隣國が、寛大に、我々を助けやうと提議して居ります。イギリスの艦隊がやつて來てゐます……

ユウゴオ。(やつまのこゝで押しこらへて。——卑劣漢！)

フアベエル。(彼を押し止め、彼の前に立ちふさがつて。——靜かに。)

ユウゴオ。——馬鹿、君は王黨なんだな。

フオセツト。——でも、靜かにして頂戴、ユウゴオさん、あの人は我々を助けやうと思つてゐるのだから。

ド・マイイエ。(輕蔑して、皮肉に。——あなた、我々は後で喉を切りつくらしませうよ。只

今の所はもつと爲すべきことがあるのです。さうです、私は王黨です。そして、あなたに残つてゐる味方はみんな四五人の例外を除いて、私のやうに王黨なんです。我々があなたの爲めに働き、死刑の危険を冒してあなた達を助けると言ふのなら、何も我々を侮辱なさる餘地はないでせう。どうか、理屈を御考へ下さい。あなたのやうな誠實な人々が、例へ、我々と違つた方法であるとしてもフランスの爲めに善事をなさうと思つて居られるのに、斯う言ふ賤奴の忿怒の爲めに犠牲になられるのを我々は黙つて居られません。我々が——國を愛することを除いては——共通の愛情を持たないとしても、我々の反感は互ひに一致する所があります。それで、あなた達が今破滅しやうと言ふ時なのだから、我々に手を御延しになつた方がいゝではないでせうか。我々兩方はどちらも信仰を曲げてゐるのではありません。そして、後になつてから、禮儀を以て、戦争を再開しやうぢやありませんか。だが、今日最も緊急な事に當る準備をしやうぢやありませんか。そして、私の申出でをうけ入れ下さい。

ユウゴオ ——我々が君達と契約を結ぶのか。

ド・マイイエ。——さう出来れば救はれますよ。今大切なことは、ジャコバン黨に對して、

あなた達をお助けすることなのです。

フアベエル。——如何なる條件で？

ド・マイイエ。——條件なんかありません。

ユウゴオ。——そりやあ、陥穽だ。そんな強盜の手をうけ入れては、我々の決心を殺す許りだ。我々が後で何をして、額おだいには百合の花(譯者曰、アウルボン王家の紋章。)の印しをつけられるのだ。

フオセツト。——でも、あなたは、一體どうなすつたの、あなたは、凡ての人々よりも一番残酷な人だわ。何故、あなたはそんなに難かしいことを仰有るの。我々を救つてくれると言ふのに。あなた達は、また外の所で戦ひをし合ふことも出来ると言ふんですのに。

ド・マイイエ。——御隨意です。あなた達を強ひやうとは決してしません。ですが、あなた



達と一所に我々は自殺することは出来ませんから、私と我が同志は、あなた達と御別れ致します。

フオセツト。——あの人は気が狂つてゐるのよ。リュックスさん、あの人に言つて頂戴。何故あの人は死なうと思つてゐるのでせう。何故、此の私を殺さうとしてゐるのでせう。

フアベエル。——マイイエさん、暫く。ユウゴオと私は話すことができますから。

ド・マイイエ。——それぢや、あなた達の御決心を待つて居りませう。

フアベエル。——リュックスさん、フオセツトさんを連れて行つて下さい。(ド・マイイエは味方と共に退場。リュックスはフオセツトを連れて去る。)

## 第七場

ユウゴオ、フアベエル。

ユウゴオ。——フアベエル、何だい。僕に何を言はうてんだ。君は僕に忠告しやうとは思はないのだらうね。……

フアベエル。——物事をありのままに見なくちやいかんよ。君は何を一番好むのか。君の敵の手に落ちることか、敵が我々と共に苦める人々の手に落ちることか。

ユウゴオ。——彼らはみんな我々の敵だよ。両方とも、危険は同じだよ。

フアベエル。——一方よりもう一つの方が、もつと危急に迫つてゐるよ。

ユウゴオ。——君はあいつらの屈辱的援助を承諾するつもりかね。バスチイユを陥れた我々が、王に戦ひを宣言した我々が、そんなことを。

フアベエル。——無益な咎め立てに、暇をつぶしちやいけない。

ユウゴオ。——僕は讓歩することは出来ないよ。

フアベエル。——僕も今の自分を少しも讓歩はしない。

ユウゴオ。——君は、祖國の敵の軍旗に従つて進むのかね。

フアベエル。——彼らは我々の軍旗に従つて進むのだ。

ユウゴオ。——決心が益々恐しくなるに従つてもう君は躊躇しなくつてくるのはどうして  
なんだらうなあ。君は元は我々の目的を疑がつたものだ。それぢや、今日は、その  
爲めに、凡てを犠牲にする程、それを信するやうになつたのかね。おゝ、僕の動搖  
してゐる意志をしつかりとする爲めに、君の信じてゐることでもせめて言つてくれ  
給へ。

フアベエル。——僕は決して戦争に與するものぢやない、そして、尙戦争を無益だと信じ  
てゐるのだ。然し、は入るべく決心した道が、どんなものであるにしても、お終ひ  
までは行かなけりやならないんだ。

ユウゴオ。——それが罪惡であるとしても？

フアベエル。——此世の最大罪惡は、己れの欲する所を欲しないことにある。己れの企て  
た所のものを敢てしないことにある。あらゆる方面に迷ひ、後ろに戻つたりして、  
觀念の途中で立ち止ることにあるのだ。矛盾は、僕にとつて、誤謬よりも一層忍び  
きれないものだ。僕が一つの觀念をうけ入れた以上、決してある感激なしに入れた

ものではない。何故と言ふに、神秘がなくなつて了ふ恐ろしい未來で以て、觀念が  
大きくなつてくることを知つてゐるからだ。然しそれをうけ入れるなら、僕はその  
中の一切のものを、うけ入れるのだ。そして、僕が自分の精神の必然さの前にたじ  
ろぐならば、僕は我を輕蔑する。斯様な弱さは、理性の自殺なのだからね。

ユウゴオ。——君の斷乎たる精神は、自分の疑惑の苦しみから君を救つてゐる。我々の目  
的が、反動の手に陥つたのを見て、君は驚かないのかね。

フアベエル。——戦ひは擴大した。も早、ひとり、祖國が働いてゐるばかりでなく、人類  
全體が之れに關してゐるのだ。革命は、精神に責任を有してゐる。世界はそれから  
模範と、解放とを期待してゐる。然し、狂亂の風が、他人を導かなければならな  
つた人々の上に吹いたのだ。世界を啓發しやうとはしないで、フランスは、世界を  
盲目にしてゐる。少數の悪人が理性に食つてかゝつてゐる。何よりも前に、理性を  
救はなければならぬ。理性を代表する凡てのものは、人類の精神を破壊せんとし  
てゐる逆せ上つた狂人共に對抗して、結束して貫きたいものだ。

ユウゴオ。

君は自ら誤まらうとしてゐる。理性の最悪の敵は、ジャコバン黨ではない。

そりや我々に勝たうと努めてゐる奴等だよ。即ち、グンデ黨譯者曰、王黨の一派。や法を破つた僧侶や、イギリス人や、オオストリア人や、過去の一切の者共だ。彼らは理性を支持してゐるやうに欺いてゐる。心の底では、それを憎んでゐるのだ。それを恐れてゐるのだ。彼らは、それを擁護してゐるやうによそほつてゐるが、世界の奴隸制度の爲めに、理性に鎖をつけやうとすることにのみ従事してゐるのだ。

フアペエル。——そんな言葉は何の役に立つ。君は一體どうしやうと言ふのか。

ユウゴオ。——君はサン・キユロット黨に對して、僕が憎惡を抱いてゐることを知つてゐる。然し、王黨よりも、彼らと一所になつた方が、まだしも厭ぢやないよ。  
フアペエル。——そりや、餘り遅すぎる。

ユウゴオ。——あの捕虜の探偵は、あのジャコバン黨の將校は……

フアペエル。——君は彼と會はうと思ふのか。彼らが我々を許してくれると思ふには、意識を失ふ必要があるよ。

ユウゴオ。——やつてみなけりやならんよ。

フアペエル。——彼らに屈伏する。何故だ。彼らが我々を輕蔑する爲めにか。

ユウゴオ。——あゝ、僕が義務を果たすのに一層困難になるやうにはしないでくれ給へ。

僕が如何に苦しんでゐるか君には解らないのか。

フアペエル。(肩をそびやかして、それから沈黙の後に、戸の方にゆく。——宜しい。すべきことをし給へ。)

## 第八場

同じ人々、セナラ・オオアウルダン。

オオアウルダン。(骨ばつた膽汁の多い冷たい憎惡に満ちた顔。彼はユウゴオミフアペエルに近づく。彼は彼らを血ばこつて憎しみの眼で見ると。——あゝ、貴様達はこゝにゐるのだね。)

フランス井ツク（譯者曰、ドイツの公爵の名、フランスを怒らせたる宣言をなしたる人。）に雇はれた横着者。こんな所に貴様達は隠れてゐたのだな。巢窟に火をつけてやれ。そして、藻屑の上で、貴様達を焼殺してやりたい。

ユウゴオ。——君が町に一揆を起すやうに努めたのかね。

オオブウルダン。——その仕事をしたは俺ではないよ。（彼は窓を見乍ら笑ふ。）貴様達は捕まつてゐる、山賊奴、貴様達は直き此世の御暇乞をするんだ。

フアベエル。——君は我々をそんなに憎んでゐるのかね。

オオブウルダン。——貴様達は人民の血を吸ふ畜生だ、變節者だ、卑怯者だ、詐偽者だ。ユウゴオ。——君は君がどんな運命になるか知つてゐるか。

オオブウルダン。——死か。死と言ふ女は知つてゐる。するぶん前から一所にねてゐるんだ。死は愛國者の情婦だ。さあ、早くしろ。俺はシヤン・ゼリゼで、聖者のプリテユス（譯者曰、ロオマの暴王タルキヤンを倒したる人。）や、俺の守護者のセブラヤ、神聖なマラアや、また、自由の爲めに死んだ凡てのサン・キュロット黨に再會する

んだ。貴様が言つてほしいと思ふなら、國民萬歳だよ。……

ユウゴオ。——僕は君に生命をあづけるよ。

オオブウルダン。——どんな汚らはしいことを、貴様は俺に申し出さうとするのか。

ユウゴオ。——僕が君を憎む以上に、君は僕を憎むことは出来ないよ。然し、公衆の救済と言ふことが、我々を接近させるのだ。王黨は我々の不和を利用してゐる。英人は町を攻撃しやうとしてゐる。

オオブウルダン。——あゝ、強盜め。貴様達は一所になつてゐるんだな。

ユウゴオ。——君達との戦ひで、我々の全力は奪はれてゐる。敵を追つ拂ふ爲めに、君が助力せんことを僕は要求するのだ。

オオブウルダン。——喜劇役者？ 貴様は我々との平和を贖はうとして、外國人をだしに使ふのだ……俺達は悪黨とは仲直りはしないよ。そいつらは殺してやるんだ。

フアベエル。——我々も君達のやうにフランス人なのだよ。

オオブウルダン。——どいほれた偽善者め。黙れ。嘘つくのは止めろ。貴様達は決してフ

ランス人ぢやないのだ。フランスを裏切つたのだ。誰でもそんなことは知つてゐる。貴様達はプロシヤ人なのだ。俺はコブウル(譯者曰、ドイツ公の名)や、その犬より二十層倍も、貴様達を憎んでゐるんだ。彼らは我々の敵であることも少しも隠しはせん。貴様達は共和國におべつかを使つて、その喉を切り取らうと言ふだ。そんな誓ひはやめろ。我々はちやんと斯うしてゐる。共和國には手も觸れさせはしない。

フア・ベエル。——氣の毒な奴、君の頭はひつくりかへつてゐる。共和國を作つたのは我々なんだよ。プロシヤ人と戦を宜したのは我々だよ。

オオブウルダン。——貴様達は彼らにフランスを賣り渡さうとしてわざ／＼そんなことをしたんだ、そうでなけりやあ、貴様達はまるで白痴になつて了つてゐる程、馬鹿で馬鹿の骨頂なんだ。我々はあらゆる方面から攻撃をうけてゐる。何處に頭をむけていゝか解らない。貴様達が此時機を選んでフランスを反亂でもつて亂さうとしてゐるのだ。……イギリス人、オオストリア人、プロシヤ人は我國に侵入してゐる。こゝから、彼らの大砲が聞える。我々はいつらを追ひかけて、あいつ等の國へ足で

けつて引くりかへして、追ひ歸してやりたいと云ふ望みで悶えてゐる。……動搖は禁止すべきものだ。皮膚に穴あける爲めに、我々はこゝでぐす／＼暇をつぶしてゐなけりやならないのだ。何故といつて、あいつら代表者の裝飾のために、田舎の哀な奴らに一揆を起させるに、三十人の下司奴の御氣に召したからなのだ。祖國がそう物語つてゐる。貴様達は、こんな商賣をして我々に平和を製造しやうとしてゐるんぢやないか。

ユウゴオ。——我々は正義の爲めに戦ふのだ。

オオブウルダン。——正義、解り切つてゐる、それが貴様達の利益なのだ。一體我々が貴様達に悪いことをしたと言ふのかい。えゝ。で、貴様達は自分の悪いことを贖はうとして、國民と共和國を危くし亡ぼすのを正義だと思つてゐる。我々が貴様達に悪いことをしたと云ふのか。だが、今は貴様達に係はり合つてゐる時機だと思つてゐるのか。人が悪いことをしたのは貴様達にばかりと言ふのか。そして、此の俺等だつてひどい目にあつてゐるのぢやないのかね。俺はこゝでは、彼等が軍隊

の委員とした小魚に、止むなく服従しなけりやならんのだ。詩ばかりしか言ふことを知らない青二才、その馬鹿さ加減で屈辱を感じる青二才に服従してゐなけりやならんのだ。始終彼奴は半分酔つぱらつて、頭を権力と台詞に向けてゐるんだかね。

俺は一度彼の鼻先きで笑つてやつたことがある。それからと言ふものは、彼奴は俺を斷頭臺に上げてやうとねらつてゐるんだ。我々はそんなこともしてゐない譯ぢやないんだ。憲法議會が、あらゆるものに眼をくばることが出来なくつて、誤ちもあることは解り切つてゐる。そいつは、運仕事だよ。負ける人々は氣の毒だよ。俺達だつて當てにはしてゐないんだ。國家が勝ちさへすればいゝんだ。帽子屋さん、人間は自分の爲めに生きてゐるんぢやないんだよ。人類の爲めに生きてゐるんだよ。

フアベエル、——不正不義は只一つあつても、人類を不正なものとするんだ。

オオプウルダン、——一切の人間の善の爲めに、罪人は犯されても、それは不正不義ぢやない。それは正義だ。そしてそれを知り乍ら、それを堪へ忍ぶ勇氣のないものは、憐憫をかけてやるべき罪のない人ではなく、それは利己主義者だ、卑怯者だ。

フアベエル、——さうだ、君は、他人になされる罪惡は忍ぶことが出来るだらう。

オオプウルダン、——他人にだつて、自分にだつてさ。おれは自分以上に憐憫を尊重はしないさ。

フアベエル、——それぢや、君は誰を尊敬する。

オオプウルダン、——共和國だ、俺の仕事だ。血を以て、貴様の血をもつて、俺の血をもつて、苦痛と死をもつて、俺達はそれを不滅に築き上げるんだ。

ユウゴオ。(傍白。)——此野獸の頭には、稻妻のやうな盲目的な光がある。

オオプウルダン、——貴様達が貧乏な人ならまだしもだ？だが、貴様達は他人よりも教育があり。金持で暇のある中流人なのだ、革命を起して、共和國の何たるかを知り、無智であると言ふやうな口實を作ることの出来ない人間なのだ。……卑劣な奴？貴様達はくたばつて了ふんだぞ。

ユウゴオ、——馬鹿、貴様達が祖國を殺してゐるんだ。

オオプウルダン、——祖國つてえのは、俺達のことだよ。

ユウゴオ。(傍白)——俺だつてもそう言つたんだ。(オオプウルダンに)窓の所へ来い。あの軍艦を見ろ。ありやイギリス兵だ。

オオプウルダン。——謀叛人？ 貴様はあいつ等にフランスを賣り渡すのか。

ユウゴオ。——人々と共にフランスを救んだ。

オオプウルダン。——妥協なんかしないぞ。

ユウゴオ。——俺は只一つしか要求しない。俺達を出て行かしてくれ。出来るなら、國境まで、俺達を護送してくれ。

オオプウルダン。——斷頭臺までかね。

ユウゴオ。——王黨が避難所を與へてくれると言ふのだ。俺達をせつはつまつたやうにしない方がいゝな。

オオプウルダン。——貴様達が世界の果てに逃れても、革命の手は貴様達の所までとどくんだ。

ユウゴオ。——貴様はイギリス人が町を取つてもいゝと思ふのか。

オオプウルダン。——誰が取つたつていゝんだ。俺達は後で奪回するからだ。

ユウゴオ。——貴様、フランスをめちやくちやに破滅して了ふのだぞ。

オオプウルダン。——その破滅が貴様達をも粉碎して了ふなら、何だつて構ふもんか。

ユウゴオ。——野獸め、それぢや俺達は貴様に何をしたと言ふのか。

オオプウルダン。(興奮して)——貴様達は俺にな、貴様達はな最も残酷な罪惡を犯したのだ。貴様の血をみんな流しても十分に贖ふことの出来ない程の罪惡を犯したのだ。……あゝ、貴様達があの人々の生命の爲めに、只だ、一つの生命しかやれないとは！

ユウゴオ。——誰のことを言つてゐるんだ。

オオプウルダン。(急に自己の中に閉ぢ籠もつて)——何でもない！貴様達は斷頭臺に上るのだ。國民はさうしたいと思つてゐる、法律もさう欲してゐる。そして、俺もさう欲してゐるのだ。俺が例へ捕虜であつても、俺は貴様達の勝利者だ。ぶる／＼慄へろ

ペテン師、貴様達はくたばるんだ。

ユウゴオ。——貴様はそれより先きに死ぬのだぞ。

オオプウルダン。——貴様の頭がなくなれば、俺の頭はどうなつてもいい。

ユウゴオ。——怪物め。貴様がさう言ふ氣なら！（彼は戸口に走つてゆく。）ド・マイイエ君！

ド・マイイエ。（這入り乍ら。）——御決心がつかしましたか。

ユウゴオ。——君のいゝやうにし給へ。

ド・マイイエ。——私は信號をしませう。

ユウゴオ。——賤奴め！あいつは俺が恵を嘆願して、彼奴に命を助けてくれろと言ふこと

を強ひるのだ。……はゝゝ……

フアベエル。——僕は堡壘にゆくよ。

ユウゴオ。——暴動を粉碎してくれ。

ド・マイイエ。——上陸を助けて下さい。

フアベエル。——僕は僕の義務をする。君は君の義務をし給へ。

ユウゴオ。——人民を掃射しろ。

## 第九場

オオプウルダン只一人、次ぎにリュツクス。

オオプウルダン窓に近づく、外では、群衆の叫びと、戦闘の音。

オオプウルダン。（拳を示し乍ら。）——暗殺者奴！あいつ等は、俺達の同胞の喉をえぐるのだ。

リュツクス。（混戦の音をきいて、駈けながらやつてくる。）——みじめな人！お止めなさい。

あなた達は何をするんです。撃つちやいけない。撃つちやいけない。（大砲音。リュ

ツクスは泣き乍ら膝まづく。）あゝ、共和国！共和国！

オオプウルダン。（リュツクスを驚いて眺める。）——君は誰だい、え？

リュツクス。——此弾丸がみんな身體の中に這入らせたいと思つてゐる不幸な者です。



オオブウルダン。——君は他の者に誘はれてさうなつた弱い無邪氣の人のやうに見える。

だが何でも構はん、俺は君を同様に憎んでゐるんだ。罪惡をうけ入れた奴は、罪惡をした奴と同様に罪人なのだ。

リュツクス。——君はそう言ふ憎惡がよく厭になりませんねえ。

オオブウルダン。——君達は俺の心を掻きむしつた。君達の心が責め苛なまれない限りは俺は満足しないのだ。

リュツクス。——あゝ、シャルロットさん、あなたが身を犠牲にしても、無駄なのですか。

オオブウルダン。——君は誰のことを話してゐるんだい。

リュツクス。——マラアを殺した人です。君はあの人を知らなかつたのですか。

オオブウルダン。——俺が其を知つてゐたならなあ！あ、……

リュツクス。——君は泣いてゐますね、君も矢張りあの人を愛してゐたのですか。

オオブウルダン。——誰でも俺のやうにあの人を愛したものはあるまい。あの人死後、俺はどうしても復讐をしてやらうと望を抱かないで生きてゐる日はないんだ。

リュツクス。——あの人の復讐？——一體誰のことなんです。

オオブウルダン。——マラアのことだ。

リュツクス。——君の愛してゐるのはマラアなんですか。

オオブウルダン。——それぢや、君は誰のことを思つてゐるのだ。あの人卑法な暗殺者をかい。

リュツクス。——天使のやうな殺人者を、そんな風に言はないで下さい。

オオブウルダン。——悪者奴！……それが貴様達がいくら苦しんでも贖ふことの出来ない

恐ろしい罪惡だぞ。おゝ、マラア！俺の主人！俺の友！あなたが我々、貧しい者、虐げられた者を御愛しになつた爲めに、そして、一生涯、あなたは我々の爲めに苦しまれた爲めに、彼らはあなたを殺しました。十字架にかけられたキリストを殺したのも、敢てしなかつたやうなことをして、彼らはあなたの首斬人の爲めに、祭壇を立てました。あの子の血を好む偽善が、あなたの深切に訴へて、空々しくもあなたの傍に行く道を開き、憐憫に燃えてゐるあなたの心臓を貫いたのでした。

リュックス。——馬鹿な！罪惡をなくさうとして身を捧げた人を侮辱して貰ふまい。

オオブウルダ。——それぢや、貴様は何故俺の愛してゐる人を、侮辱するのか。絶望してゐる數千の人々に、力の意識と幸福な人生の望みとを與へた人を侮辱するのか。

リュックス。——何だつて？、あの怪物が善をしたつて？あいつは君達にとつて親友だつたのか。

オオブウルダン。——我々を愛してくれた只一人の人なんだよ。彼の人はフランスの中で只一人、如何なる高價な價を拂つても、全世界に眞理を言ふことを敢てしたのだ。

そうして、常に眞理を眞正面に見、他人に惜しけもなく其を示すと云ふ此男らしい勇氣が、彼の人に恐るべき明敏と未來の豫言的洞見とを與へたのだ。罪惡と陰謀の渾沌たる中であつて、彼の人の勇敢な眼差は行動するに先だつて、共和國の敵を戦慄させて、深く突き進んでゐた。彼の人は自由の目であつた、民衆の代へ難き良心であつたのだ。その爲めに、どんなに貴様達は皆して彼の人を憎んだことだらう。

此人が貴様達に向つて、民衆の擁護をしたこと、あの不幸に疲れ切り、常に苛なま

れ、踏み躓られ、虐けられた民衆の擁護をしたことが、貴様達には忍びきれないことだつたのだ。あゝ……せめて、民衆が、あの人の獻身を認めることが出来たらなあ……だが、彼の人は忘恩と憎惡とをうけても決して不平をこぼさなかつた。『徳は、我々の愛をあてにするやうになれば、利害關係となる、』と彼の人は言はれた。あらゆる缺乏に陥れられ、仕事と徹夜とで疲れ切り、暗殺者に取りまかれ、退き退いては逃げかくれ、同じ床に引續いて二晩とは眠ることが出来なくても、あの人は幸福に輝いてゐた。目的の偉大さ、美しい行爲の喜び、勝利の希望が、あまい快樂をもつて、あの人の心に深く這入つてゐた。

リュックス。——彼の心中に、それ程善良さがあつたのは本當かね。君は僕を欺いてゐるはしないかね。本當に君は彼を知つてゐたのかね。

オオブウルダン。——俺は孤兒だつた。俺は亂暴な親方に仕へてゐた、打擲をうける恐れからのみその專政を尊敬してゐたものだ。俺は身持が悪るかつた。自分の放蕩を満足しやうとして、主人の金庫から盗み出したことがあつた。彼はその現狀で俺を捕

まへ、さんぐになぐり、巡査を呼んで來させた。それは、恥ぢ晒して、徴役をうけることになり、生きた死人となることだつた。マリア様が通りかゝて、店の周圍に人のよつて集つてゐるのを認めた。彼の人は話をきいて、俺を見つめた。あの人はどんな恐ろしい眼で俺の魂をえぐつたことだらう。疑ひもなく、あの人はそこに生きる價値のあるのを認めただらう。あの人は俺の主人に願つて手切金をやり、自分の家へ俺をつれて來てくれた。あの人は俺を養育したのだ。あの人によつて、俺は人間たる威嚴をもつ喜び、自由の誇り、良心の神聖な陶醉を知つたのだ。あの人の亂暴さが、深い憐れみの心を押しかくしてゐたのだ。あの人は決して俺の悪いことを腹を立てることはなかつた。却つて、ある時、俺がふだんよりもつと卑しいことをした時には、咎め立てなんぞしないで、俺を接吻して泣かれた。そして、俺はあの人の中に、人類の不幸に對して、非常に熱烈な悲しい友愛的の憐憫を感じたので、俺はそれから、こんな誤ちを犯して、あの人に二度と斯様な悲みを引きさせるより死んだ方がましだと思つた。あゝ、憲法議會は如何して俺を軍隊に召集

しなけりやならなかつたのだらう。俺があの人傍にゐたら、あの寛大な生命を奪ひとるやうなことを決して貴様達にはさせなかつたのだが。

リュックス。——だが、そんな優しい心を持つてゐる乍ら、如何して、殺人や憎惡を鼓吹することが出來たのだらうね。

オオプウルダン。——あの人は、一切の憎惡の重荷を引きうけやうと思つたのだ。あの人の夢想してゐた獨裁政治は、犠牲をして、地獄の神に捧げられ、祖國の血まみれた仕事の責を負ひ、罪を贖ふ政治だつたのだ、あの人は自分に恥を引きうけ、貴様達に名譽を與へられたのだ。

リュックス。——彼女だつて、罪を犯して、世の中を救はうと思はれたのだよ。

オオプウルダン。——祖國をえぐり殺した女の名なんかもう言ふな。

リュックス。——あゝあの人が間違つてゐたとしても、あの人が生命でそれを贖なつたと  
言ふことを考へ給へ。

オオプウルダン。——彼奴の生命なんな宇宙の爲めに紀念すべきものぢやない。彼女の亡

した生命こそ革命の魂だったのだ。

リュッククス。——あの人は、どんな價を拂つても、平和を立てやうと欲されたのだ。

オオプウルダン。(廣場を示して。)——いゝか！ あれが彼女の仕業だぞ。彼女のした仕事

はこれだぞ。血と火の波、憎しみの海、フランスを貪りつくす内亂！

リュッククス。(耳をふさぎ。)——そんなことはない！ この原因はあの人ぢやないんだ。

オオプウルダン。——エロストラアト(者譯曰、昔、物を破壊して後世に名を残さんさせる人な

り。)のやうに、破壊の中に、咀ふべき名譽を求めた血を好む此女役者を、時代は永

久に咀ふのだ。

リュッククス。——あゝ、シャルロットさん、それは本當ですか。あなたは間違つてゐたのですか、此災ひはあなたのした仕事なんですか。そんなことをして、あなたは身を亡ぼして了つたのですか。そして、あなたは此世を血まみれにする外にはしなかつたのですか。……あゝ、あなたは間違つてゐた。マリアは罪惡ではなかつた。彼は我々凡てのやうに、またあなたのやうに、善をなさうと欲して、惡をしたのです。

あゝ、愛する魂よ、あなたが自分の行爲が無益だと悟られたら、どんなに苦しまれるに相違ないでせう。せめて、彼が不幸ではないやうにしたい！ 私があなたの誤ちを贖ふことが出来るやうにしたい！ 謙遜なりユッククスに靈感を授けて下さい。私の愛の爲めに、皮肉な運命が、あなたの潔白な手でした罪惡を贖ふ方法を示して下さい。

## 第十場

同じ人々、ユウゴオが、烈しい騒動を起さんとしてゐるマイイエとその味方に脅かされて這入ってくる。

ド・マイイエ。——裏切りだ。見ろ、見ろ。堡壘はイギリスの艦隊に砲撃してゐる。ゴアベ  
エルは我々を裏切つたのだ。君達の誠とはこれなのだね。裏切り者奴！ 君達はぐ  
るになつてゐたのだらう。

ユウゴオ。——僕の名譽に誓つて言ふが、ファベエルは僕に報らせないで、自由行動をしたのだ。

ド・マイイエ。——だが、君は彼のしたことをいゝと思つてゐる。君が嬉しさを包み隠さうと努めるにも係らず、君の顔は喜ばしさうだ。

ユウゴオ。——僕は自白する。僕はもう僕の身は亡びたと思ふ。だが、僕の心は、我にもあらず嬉しいのだ。

王黨。——貴様はくたばるんだ。(彼らに彼は飛びかゝる。)

ド・マイイエ。(ユウゴオの前に立ちふさがり。——彼をこのまゝにしておき給へ。彼の心は誠實なのだよ。(彼は肩をそびやかす。))我々が彼に信頼したのが誤りなのだ。それつきりだ。

王黨。——もう一時も斯うしては居られません。海へ出る道は立ち所に遮断されます。逃げなけりやなりません。

ド・マイイエ。(一瞬間躊躇の後、ユウゴオに。——あなたはあなたの義務をなすつた。我々の

船へお出でなさい。

ユウゴオ。——僕はファベエルがゐないと、何にも決めることは出来ないのだ。

リュツクス。(かに立ち上つて、外へ出やうと思ふ。獨白。——罪惡は人間ではない、それは凡ての人の中にあるのだ。罪惡は利己心だ。自分は今は悟つた、打ちのめさなければならぬのは自己なのだ、自分の心から抜きとらなければならぬのは、自己なのだ。それで自分から自己を取り去ることの出来てからは、一切のものがよくなるのだ。

ユウゴオ。——リュツクス君、君は何處へ行くのだ。

リュツクス。——さようなら。

ド・マイイエ。——あの人は何を言ふんだ。我々と一所に來給へ。(リュツクス頭をふる。)

ユウゴオ。——君は我々と別れるのかね。

リュツクス。——僕は罪惡から別れるんです。僕のやうにして下さい。

ユウゴオ。君は我々の主義を否定するのか。

リュツクス。——僕は悟りました、自己犠牲をするのでなければ、善は善でないと云ふことを。勝利は、何であれ、悪るいのです。敗北はそれが何であれ、意志でするなら、いゝものです。身を捧げるんです。自己を破壊するのです。……あゝ、それは、僕があなた達を愛する爲めです。僕があなた達の汚れを、僕の血で洗はふと思ふからなのです。

476 —

## 第十一場

同じ人々、ファベエルは、いつものやうに、落ちついて、冷靜に、皮肉に這入ってくる。

王黨達。——そら、裏切り者だ。

ユウゴオ。——ファベエル。君は何をしたんだ。

ファベエル。——僕は知らない。本能が、智識よりもつと強かつたのだ。恐らく、もつと

利巧だつたと言つた方がいゝ。僕はフランスの中に、外國人が這入つて來たのを見

ると、僕の理屈の一切の足場は崩れたのだ。僕は砲撃しろと命令した。——あそこ  
で彼らはどう僕の必要がなくなつた。大砲はひとりどんどん／＼發してゐる。

ユウゴオ。(愛情をこめて。)——それは全く、君の理性と意志を拂ひのける苦みだつたのだ

ね。いろ／＼の努力をした後で、君は丁度、リュツクス君と同じ所に達したんだよ。

ファベエル。(愛情をこめて微笑し乍ら、リュツクスに手を出す。)——理性と狂氣とは、手を握り  
合つてゐる。……ねえ君、罪惡は、常に判断の誤謬なのだよ、罪惡は愚かなためな  
のだ。

ド・マイイエ。——急いで、逃げて行かう。

ファベエル。(頭をふつて座る。)——勝負はついた。祖國は失はれてゐる。

ユウゴオ。(ド・マイイエに。)——さようなら、あなたと御味方は避難して下さい。僕達は残  
つてゐます。

フォセツト。(這入つて來て、立つて行かうと全く仕度してゐる。)——ユウゴオさん、何を仰る  
の、あなたは行かうとはなさらないのですつて？

— 477

ユウゴオ。——可愛さうなフォセツト。僕は彼女を忘れてゐた。……我々は彼女をどうし  
たらいいのか。我々には彼女を我々の運命に陥れる権利があるのだからか。

フアベエル。——否。自分の信じてゐない義務の爲めに自己犠牲をすることは、善でなく  
悪なのだ。第一の法則は眞實であることにある。此の哀れな少女は、生きる爲め、  
愛する爲めに作られてゐるのだ。彼女は我々をおいて行かせるといふ。

ユウゴオ。——行けよ、愛する者、逃けてお出で。

フォセツト。——あなたと、御一所によ、御一所によ。

ユウゴオ。——駄目だ。

フォセツト。——ぢやあ、あなたは私を殺さうと仰るの。あなたは私を愛して下さいさらない  
の。

ユウゴオ。——ド・マイイエ君、彼女をつれて行つてくれ給へ。

フォセツト。(王黨達に引張られて泣いて争ふ。——厭です。厭です。(人々彼女をつれてゆく。)

ド・マイイエ。(出る間に。——さうなら。私はあなた達を讚美します。そして、お氣の毒

に思ひます。あなた達も私を氣の毒に思つて下さい。私はもうあなた達の主義とは  
争ひますまい。あなた達は私を打ち負かした。リュツクスさん、私はあなたの言は  
れたことに服します。私は出發します、遁世して埋木となります。此世を變へやう  
と思ふものは氣狂ひです。世界は、偶然な氣紛れのまに／＼になつてゐます。一層  
高い理性の方に、世界を導かうと努めた一切の我々の努力はお互ひに破壊し合ふこ  
とになつてゐます。運命の意志に反するあらゆる努力は運命を一層和け難い残酷な  
ものとなすに過ぎません。——どうしたらいいのか。いつそあきらめをつけて、沈  
黙を守ることなんです。(彼は味方と共に去る。)

## 第十二場

ユウゴオ、フアベエル、リュツクスは微笑しながら顔を見合はせ、接吻し合ふ。  
オ、フアベエル、リュツクスは微笑しながら顔を見合はせ、接吻し合ふ。

オオプウルダン。(あつげに取られ。)—彼らは氣狂ひになつてゐる。

ユウゴオ。—僕は自由になつたやうな氣がする。僕の心は、疑惑から離れてゐる。意志よ、お前はもう休息してもいい。

フアベエル。—我々の勝利は共和國を一層美しいものとしたかもしれない。だが、我々の腕がその仕事をするに餘り弱すぎるならば、我々より一層強いものが、我々の代りにそれを成し遂げてくれ。彼らの汚れた手で、仕事は成される。我々の血を犠牲にしても、人類よ、進歩してくれ。

ユウゴオ。(オオプウルダンに。)—行け、彼らの爲めに戸を開いてやれ。

オオプウルダン。—俺は夢を見てゐるのだ、あゝ、夢を見てゐるのだ。彼らは我々の爲めに仕事をしてゐるのだ。(彼去る)

フアベエル。—喜ぶんだ。我々は、恥辱しの勝利から、我々の信仰を救つたのだ。かゝる勝利に打ち勝つ者は、第一の犠牲者だ。我々の健全な純粋な敗北の中に、信仰は花が咲くのだ。

ユウゴオ。(窓にかゞみ乍ら。)—賤民共、這入れ。犬め、思ふ存分にしろ。



### 第三幕

寺院の倍者席。右手、祭壇の上には、木の葉と黄楊と紙張りの岩の真ん中に、理性の女神の玉座  
周囲の籠の中には、三位一體としてマリア、ルメルチエ、及びシヤリエの三つの像がある。唱  
歌席には、食物を盛つた馬の形をした鐵の大テェアルが立つてゐる。民衆は喜ばしげに、宗教  
的な遺物や司教の首にかける金翠や笏などで變装し、手には、聖體盒と笏杖を持つてゐる。  
肩を裸にした少女達や、革命時代の上衣を着た男達が踊つてゐる。オルガンは喇叭や太鼓を入  
れた輪舞曲を奏してゐる。  
人民代表者、プウレ・リユオオ、髯を剃つて喜劇役者のやうな誇張した大きな顔をして、油  
ぎつた術學的な白痴のやうな微笑を堪へ、腮や眼に痙攣を起してゐる。理性の女神は美しき金  
髪の豪華な娘で、白衣を着、甚だしく襟足を露はし、ギリシヤ式に「身體をあらはに」してゐ  
る。

#### 唄と踊

民衆（歌ひ乍ら。）

Que le sultan saladin (譯者曰。マホメット教の酋長の歌。)の調子で。

獨塊の槍騎兵の大王が、

移住者を信じて、

自分が苦んでゐると言ふて、

ブリツソ黨(譯者曰、シロンド黨のこま。)の手を通じて、

四週間でフランスを取らうと思つてゐる。

それでいゝのだ、ほんとにいゝのだ。

それは我々を少しも傷けはしない、

彼は名聲の代りに何を得たか、

可……の外には何でもないのだ。(二度繰り返す。)

(作者曰、實演の際には、エム・ツイ・シエニエマセツクの Camp de Grandpré の輪舞曲によつて歌はさりかへられたり。)

民衆。——女神をお通ししろ。(プウレ・リュオオオル、理性の女神に手を與へて、眞赤になり、汗ばみ、微笑し乍ら、媚びるやうに、自分の尊大さにぞく／＼して進んでくる。彼は彼女を玉座に案内し、祭壇の段から、民衆に演説をする。)

プウレ・リュオオオル。——一寸あなた達の無邪氣な喜びをお止め下さい。喜びの甘い光りで額ひの輝いてゐる若い處女達よ、あなた達の踊を止めて下さい。優しい情であなた達の樂みを控へて下さい。祖國の擁護者よ、我々の傍に、あなた達の友をつれて來て下さい。尊敬すべき老人達よ、あなた達の子孫に幸福が來るのを見て、乾いた眼から、純潔な感すべき涙の波を流して下さい。だが、我々の偉大な仕事の果實を摘みとる祖國の柔しき弟子よ、あなた達は、第一の席を取つて、眼を見はつて、人類の勝利を眺めに眺めて下さい。——おゝ、すばらしい光景よ！ おゝ、解放されたる

民衆よ！そして、自然の娘、幸福と徳の母たるあなた、柔しい神聖な理性よ、あなたの帝國があなたに返りました。不可能の寺院は、眞理の家となりました。今迄猶太人の血なきぐさい偶像で飾られてゐた奴隸の記念碑たる此祭壇の上には、今は自然の傑作、美の手によつて作られた魅力ある歡樂と純白な快樂の美しい觀念からのみ湧く此肉體が立てられてゐます。おゝ、我々を抱擁する熱誠よ！美しき婦人の市民よ、我々の感激を許して下さい。理性よ、人類を代表して、私はあなたを接吻します。(彼は理性を接吻する。民衆笑ひ、彼を喝采する。)

プウレ・リュオオオル。(激しい調子を取つて。)—市民諸君、我々は勝つたのです。謀叛人は鎖につながれてゐる。丸帽(譯者曰、僧侶のこゝ)は地に落ちた。貴族は死に垂々としてゐる。我々に反抗して同盟した悪人共は、倒れて了つた。此祝日を完成しやうぢやありませんか。勝利を得たシピオン(譯者曰、ロママの名將スキピオのこゝ)の様に、敗北した狂信者共を、車の後につけて引きさらうぢやありませんか。あいつ等を、理性の足下に鎖でつないで練り歩かせやうぢやありませんか。共和國の神聖な處女

よ、彼等を足で踏み碎いて下さい、蛇共を踏み碎いて下さい、ジロンド河(譯者曰、葡萄酒の産地、ポルドオ市を流れてゐる川。)の酒を入れる我々のコップに、ジロンド黨の血を交へないと、我々のお祝ひは完全なものとはありません。彼等をよこして下さい。彼等をつれて来て下さい。我々が勝ち行列をする前に、悪徳を虚無の中につつこんでやらうぢやありませんか。(彼は身ぶりをする。人々、ジロンド黨員、ユウゴオ、フアベエル、リュウツクスをつれてくる。彼らと共に、熱病的な快活を表はしてゐるフォセツトがゐる。——民衆は彼らを罵る。僧衣と笏をつけてゐる一人の男が、彼らの前に進み、をかしげな歩調で踊る。少女達は、嘲罵を叫ぶ爲めに、飛びはれてゐるのを止める。)

民衆。——王黨を殺せ！(始めの輪舞と歌とが始まる。)

フォセツト。 あゝ、あの人達は何をしてゐるんでせう。寺院の中で踊つてゐるわ。まあ、我々の聖母の廣場に何を置いてゐるのだらう。まあ、あの人達は、邪教徒なのね。ユウゴオ。——氣の毒なフォセツト、せめて、お前丈でも逃げてくれるといふと思つた。フォセツト。——私はあなたの傍を離れることは出来なかつたのよ。船に上る時、そう言

ふ情が私の身體より一層強くなつたのよ。私は歸らなければならなくなつたんですの。意地悪るね、私を死なせやうなんて。あなた達みんな本當に残酷だわ、殊に、フアベエルさんはひどいわ、輕蔑するやうな憐憫をしてね。あなた達は、私が生きて愛する丈にしか役に立たないと思つてゐるから、私に恩恵を與へたんですつてね。あゝ、私が生れたのは、愛する爲めぢやないわ。ユウゴオさん、あなたを愛する爲めなのよ。——さあ、悲しむのはよませう。他にしやうもありませんから、笑ふやうにしなくちやいけないわ。私はそんな女よ。さあ、私、それでもあなた達と御一所になつてこんな嬉しいことはなくつてよ。もう離れるのは厭よ。後世、人々は歴史の中で、私があなたと御一所にゐたことを物語つてくれるでせう。ではなくつて? 私達の肖像が本の中に出るでせう。後に其れが餘り悪るいやうになりさへしなければね!

ブウレ・リュオオオル。——そら、あれだ、あれが、フランス井ツクで吐き出された人類のかすだ。あの親英的なプロシヤ人は、荒れ果てたバリイに刺戟物をまいたことを誇つ

てゐる。彼らは山獄黨(譯者曰、シヤコバン黨のこゝ)を顛覆しようと欲したのだ。山獄黨は彼奴らを粉粹した。理性よ、勝利だ。獸は陥穽の中に這入つた。彼らを打ち

殺して了へ。

ユウゴオ。(頭をあげ、ブオレ・リュオオオルを征服し難い眼付で睨み。)——貴様の侮辱は、輕蔑してゐる俺の心には少しも響いて來ないぞ。俺自身の外は、俺に對して何人も何にもすることは出來ないのだ。外ばかり理性の名で、おほはれてゐる噓語を、血迷はずに考へて見ろ。我々の中の理性が墮落しないと云ふ此一事のみが大切なことだ。それでどんな犠牲を拂つたにしても、我々は墮落してはいけないのだ。凡人共を輕蔑してやらう。群衆になんぞ如何なる讓歩もするもんか。悲しむことなく、際限もなく、我々はありのまゝでゐてやらう。

民衆。——あいつは民衆を侮辱してゐる。

ユウゴオ。——俺は民衆を侮辱なんかしない。民衆を否認するのだ  
ブウレ・リュオオオル。——貴様の戰勝者の前で平伏しろ。

ユウゴオ。——貴様になんぞするもんか、俺の意志の前ではするが。

ブウレ・リュオオル。——まったくだ。それぢや、貴様が自ら身を渡すやうな馬鹿なことを  
何でしたか言つてみる。

ユウゴオ。——徳の文法も知らないものと、徳の言葉を話しはしないよ。

フオセツト。——おゝ、でも、こんな時でも、あの人々は物を食べてゐるのね。食卓、肉、  
酒、御馳走を食べてゐるわね。そして、祭壇の上にもあるわ。豚の群よりもいけ好  
かない人達だこと。くさい！おゝ、まあ、何てをかしいこつたらう。(彼女を接吻しや  
うとして近づつて来た男に。) 悪黨奴、あちへ行つてゐる。ふん！ 菲や酒の悪臭をぶ  
ん／＼させてゐる醜惡な奴——ユウゴオさん、あの人達の踊るのを御覽なさい。足  
がむづ／＼する。私もう構はないわ。あゝ駄目ね。(彼女は踊子の群に手をのばす。)

民衆。——うまい、可愛奴め。彼女に場所をあけてやれ。

フアベエル。——彼女は、最後の日の来たと言ふ感激で酔つぱらつてゐる。眼がぎら／＼  
して、頬が眞赤だ。彼女は恐怖と誠實の熱にかされて生きてゐる。自分のするこ

とを殆ど意識してゐるのだ。

ユウゴオ。——可愛さうな奴、彼女は考へない方が却つていいのだ。

民衆。——代表者様、あの子をお赦しを。

フオセツト。——お黙りなさよ。私、お前達のお赦しなにか、いらぬことよ。お前達は私を嫌がらせてゐるのだよ。お前達はみんな強盗だわよ。

### 合 唱

フランス人よ、理性はお前達を輝かしてゐる。

神秘のヱエルの下に、

僧侶共がお前達の祖先をだましてゐた此所へ、

此場所へ理性を拜みに來い。

我々の福音書は自然である、

そして、我々の崇拜は徳である。

ファアベエル。(信仰の穩かな興奮を以て。)——精神はどんなことをしても勝つのだ。我々は理性を人間共に持つて來た。彼らの頭は、その力強い飲物に堪へるには、餘りに弱かつたのだ。理性は彼らの獸のやうな魂を狂はせたのだ、酒の女神の酔つた腕が、彼ら自身の肉體を破つたのだ。そんなことは構はない。ある神が彼らの中に動めいてゐる。此多數の人間は、必然性の盲目な機械なのだ。その神を讚美しやう。平伏しやうじやないか。

アダム・リュックス。(非常に悲しげに、落膽して、口をつぐんで、離れて立つてゐる。)——おゝ、人間よ、私の心ははり裂ける。此心にふくらませてゐる思想を、もう永くは押へつけておくことが出来ない。その時は來た。勝つたものも、負けたものも、我が不幸な兄弟よ、私の言ふことを聞け。君達は恐ろしく陽氣であるにも係はらず、みんな不幸者なのだ。私を欺くことは出来ない。何故と言つて、私には、その衣の下には、宇宙の慘苦が、齒をがたく／＼させてゐる音が聞える。私の言ふことを聞け。斯う喋

る私は、もう生きてゐる人間ではない、死人なのだ……

おゝ、フランス人よ、如何に私は君達を愛してゐたことだらう。フランスの覺醒は、私の心に、どれ程喜びを持ち上げてくれたらう。それは、『キリストがよみがへられた、キリストが死の鎖から出られた、世界は自由だ、世界は自由だ！』と、野原を一つの聲が鳴り渡つたやうな氣がした。……天國の約束、人類の更新を樂しまうとして、私はどんな信用を以て、君達の方に駆けつけたことだらう。——あゝ、パリーの街で私を迎へた第一の物は、斬られた首であつた、槍の先きに突きさゝれた悲しむべき首であつた。悲しみと恐れとが、彼女の哀れな眼に満ちてゐた。……おゝ、我が友達よ、誰が君達を救つてくれるのだらう。君達はそれ程氣の毒な人達なのだ。私は君達を長い間惡口してゐた。君達の残酷さ、卑怯さは私を反抗させた。そして、私は死よりも惡い煩悶の中に生きてゐた。然し、一婦人の犠牲が私の眼を開いてくれた。私は、始めは解らなかつた。私は力でもつて罪惡を亡ほさなくてはならないと信じて、罪惡のみしかしなかつたのだ。私は今こそ解つた、純粹な獻



身こそひとりの、君達の罪惡を贖ふことが出来るのだ、と言ふことを。世界に 第二  
の犠牲によつてしか、洗濯は出来ないのだ。其は自ら進んで捧げたある正しきもの  
の血、一救世主、デシユス、キユルチユスの如き人だ。(譯者曰、デシユスもホエユル  
チユスも、ロオマの愛國者にして、祖國の爲めに身を犠牲に供したる古代の人)自分は、それ  
が誰であるかは知らないが、その人に来て貰ひたい。あゝ、神よ、それが私であつ  
たなら! 私の死が人類を和めることが出来るのなら! 奇蹟よ! その人に来て  
貰ひたい! 何故、その人はこんなに手間取つてゐるのか。我々はその人がるなけ  
れば何をすることも出来ない。武器をとつて、戦つたり、抵抗したり、壓政と争つ  
たりしても何の役にも立たない。理性は何にもすることは出来ない。力は何にもす  
ることは出来ない。おゝ、兄弟よ、兄弟よ、愛するんだ。穩かな平和を潔白な光を  
見るんだ。幸福に暮すんだ。主よ、私があるあなたの機械であるやうにして下さい。私  
によつて、人々を救つて下さい。彼らの爲めに、私を苦しめて下さい。私の肉體を  
奪ひ、私の苦痛を奪ひ、私の永久の魂を奪つて下さい。(彼は腕を天にのばす。)おゝ、

あなたは私を必要とせられないのですか。私は死んで尙彼らの罪惡に罪惡を加へるやうになることを御許しになるでせうか。せめて、彼らの爲めに、私を殺したと言ふこと丈は見逃して下さい。私の愛してゐた此人々を亡ぼして丁ふ最高の苦痛を私の爲めに御許し下さい。おゝ、奇蹟よ！ 奇蹟よ！ 來い！ 來い！ ……（彼は食卓の上の二本の短刀をつかみ、不可思議な怒りをもつて、二度まで、胸の中にそれをつゝこむ。それから、天の方に、血まみれた腕をのびして倒れる。）

民衆。——彼は死んだ。（群衆、苦しい印象をうけ、動きごよめき、騒ぎ乍ら眺める。）  
理性。（厭惡して、己れの衣をかきのけ乍ら。）——彼は酔ばらつてゐる。

オオプウルダン。——此喜劇役者は何だい。

プウレ・リュオオル。——氣狂ひ奴が、本當に死んだのか。

オオプウルダン。——全く死んだのだ。彼奴、死んでいゝことをしたもんだ。

プウレ・リュオオル。——彼奴のしたことはよかつた。そうでないと、僕が結末をつけてやることになつたのだからな。

オオプウルダン。——平和だ、平和だ、……我々はみんな平和を欲してゐる。我々が、凡ての敵を殺した後に、（群衆は己れの狼狽から氣をとり直し、オオプウルダンやプウレ・リ

ユオオルの言葉をきいて笑ふ。）

ファベエル。——氣の毒なりユツクス。神秘的なロオマ魂、キリスト教徒のデシユス、君はもう希望の目的を達したのだ。君は犠牲と言ふ狂熱で亡びた。君は生命を捧けたが奇蹟は起りはしないのだ。死ぬと言ふ酔ひ心地をもつた君のみが、人類の牧場に身を捧けた奇蹟なのだ。

ユウゴオ。——陰氣くさい考は追つぱらつて了はうぢやないか。我々は世界、中で最大の歡喜を味つてゐるのだ。我々は地球の覺醒に参加したのだ。自由の春、最初の戦ひの若い喜び、王に對する民衆の十字軍、祖國にみなぎり渡る愛の無限の波……おゝ、喜びだ！ 不朽の喜びだ！ 俺の口はお前を源まで飲んだのだ。俺の心臓は、氣絶する程までに、お前に満たされてゐるのだ。我々のやうなこんな喜びは、これから人間には決して解らないのだ。おゝ、喜びだ！ 人間がお前を所有した時は、も

う生きやうとは望まないものだ。

理性。(プウレ・リュオオルに。)—わしに飲む物をもつて来てくれ。

プウレ・リュオオル。—神様が喉がかはいたとさ。水を捧げるんだ。

民衆。—<sup>ゴヨナ</sup>斷頭臺で。

ユウゴオ。(理性に。)—俺の信仰を冒瀆する美しい女よ、お前はどつであつても信仰のやうな姿をしてゐる。歡樂的な愚かなお前の眼や唇の上で、俺は彼の酔ふやうな息吹きに接吻するやうだ。俺の神聖な主の卑しい模像よ、俺はお前を愛するのだ。(舞踊さ歌は、シロンド黨に對する罵詈雑笑さに入り文つて、再び起る。)(作者曰、マリアミルヘルチエの半身像の開幕式の爲めに作つたゴセツクの讚美歌。)

ファベエル。(舞臺の眞中で。)—人間よ、膝まづけ。お前の生れて來た獸をよく見る。理性はお前の作つたものだ。お前の理解し、明かにし得た世界、お前の精神に服せしめた世界に、平和に歸れ。おゝ理性よ、理性よ、我らの神で、我らの創造よ。如何に、是らの人間はお前を辱しめてゐることだらう。それでも彼らはお前に服従する

だらう。お前は法則である。宇宙の女王である。お前は屈することを欲しないものを亡ぼす。是らの獣でさへ、お前を知らずに、お前を讚美してゐる。彼らの馬鹿騒ぎの中の勝利！ 我々の死の中の勝利！

### 合 唱

寛大な民衆の傲慢な敵、

彼は至る所で倒されるだらう。

自由は常に徳と共に進む、

そして、暴王は罪惡と共に。

惡辣な敵のつけた火は、

彼ら自身に向つてゆきその頭を雷撃した。

宇宙の共和國は、

嵐の中に立てられるのだ。

(人々シロンド黨員を引張つてゆく。民衆は之を眺めて手を叩く。リュックスの死骸は、亂痴氣騒ぎを見下してゐる理性の足許に横はつてゐる。)

フオセツト、(ユウゴオの首に飛びついて、長い間彼を抱擁する。)—あなた、私の手を取つて頂戴な。(フアベェルに。)あなたもお二人で、終ひまで私の手を取つて頂戴。(眼を閉ぢて。)あなた達で私をつれて行つて頂戴ね。私はもう見やうとは思はない。私はあなた達を非常に愛してゐるわ。それはそれは愛してゐるのよ。

ユウゴオ(群衆の叫びを征服し、不屈に。)—生命は俺の欲するものだ。俺は勝利を超越した、それでも、未來は俺が必ず勝つのだ。

民衆。——理性萬歳!

を  
は  
り

## 改版「信仰の悲劇」譯者序

前に會員で出版した自分の譯は、いろ／＼の都合で、自分が校正出来なかつたので、多くの誤植を發見し、且つ抜けてゐるやうな所もあるやうな譯で、自分は非常に困つてゐた。それで、是非、忠實な改譯を再びしたいと思つてゐたが、こゝに前出版者と完全な了解の下に、十分に訂正し出版することを得たのは、原著者に對しても、また、自分自身に對しても、責任を果したやうに感ずる。

ロマン、ロオランは、「ジャン・クリストフ」に於いて、餘りに有名になつた爲めに、人々は彼の戯曲を反對に省みやうとはしない。然し、彼が新しい試みとして、民衆を背景として取り扱ひ、民衆の意志と作中の人物と深い交渉を保たしめた點に於いて、劃時代の作と稱することが出来る。

殊に、此「信仰の悲劇」は、いろ／＼の形を借りて、痛切な信仰を表現し、深い精神に對して限らない憧憬を捧げたもので、戯曲作家としても、ロオランが傑れた手腕を有して

るたことを、十分に證明するに足るものである。更に、これが二十才前後に於いて書かれたものだと言ふに至つては、益々驚嘆を禁じ得ない。

この三戯曲は、いづれも驚くべき早熟の才を現はしてゐるが、殊に、<sup>ル</sup>第一部の「聖王ルイ」が成功してゐるやうである。王のキリストに似た深い憐憫、不屈の勇氣、限りのない信仰の憧憬は、信仰に渴してゐる現代の人々の胸に強く共鳴する所があらうと思ふ。此中には、種々の形に於けるあらゆる戀愛が現はされ、あらゆる感情・信仰と懷疑の葛藤、人間の卑しさも尊さも點綴され、その背景に民衆の盲目的な熱誠の階調が流れてゐるので、恰も、傑れた大きなオオケ・トラの音楽を聞くやうな感じがする。聖王ルイが十字軍に遠征して、苦しみの中に最後に死ぬ所で、自分は僧侶として生れたもので、フランスの爲めには悪るい王であつた、然し、後世自分のしたことは何物かを残すだらうと言ふ意味の文句があるが、誰しも、こゝまで来て、涙なしに讀むことは出来ないであらう。

「アエルト」及び「理性の勝利」も、いゝ作である。カトリシムス以外の信仰を取り扱ひ、若い力の溢れた作である。只、議論が多いので、パリイでは實演されたけれども、十



分の舞臺に上して効果をおさめる優れた俳優は少なからう。世人が彼の戯曲は、讀むべきもので、舞臺に上せることは困難のやうに言つてゐる人もあるやうではあるが、それは、未だ優れた舞臺監督及び俳優のゐるかゝるかないかの問題であつて、讀んで傑れてゐるものが舞臺でも十分効果をおさめ得るやうになることを自分は希望して止まない。

大正十一年二月廿四日

千駄ヶ谷にて

譯

者

記

信仰の悲劇

大正十一年五月二十日印刷

大正十一年五月三十日發行



(定價貳圓八拾錢)

一	和	城	新	者	總
浩		尾	鷺	人	行發
<small>東京市本區橋本町二ノ八</small>					
吉	佐	崎	川	者	刷印
<small>東京市本區橋本町二丁目三番地</small>					
所	版	活	崎	川	所刷印
<small>東京市本區橋本町二丁目三番地</small>					
社	夏	冬	區橋本	市京東	所行發
<small>東京市本區橋本町二ノ八</small>					
<small>電話本局三一二番</small>					
<small>振替東京四五四四六番</small>					

禁無斷興行

スチルネル著 辻潤 譯 四六判 上製 七百頁 極最新裝幀 布張

# 自我經

【全 譯】

定價參圓參拾錢

(送料拾六錢)

## 忽ち再版賣切 三版出版來

本書は近代個人主義の先驅者マックス・スチルネルの名著『唯一者とその所有』を全譯せるものにて、この書が夙にかのニイチエ、イブセン、アルツイパーセフ等に甚大なる影響を與へたるに見ても如何に近代思想界に獨一無二の位置を有するかを知るに足らむ。碩學ハルトマン氏の如き、本書を批評して文體に於いても哲學的價値に於ても遙かにニイチエを凌駕すと云へり。繙いて深刻無比の哲理を聴け。譯者は既定評ある老練の辻潤氏にして、難譯を以て聞えたるこの書を殊にあらゆる私事を捨て、譯了されたことを讀者諸氏と共に喜びたい。

終